わが子のあゆみ

「みずのわ祭り」ぼくたちの旗が完成したよ

岐阜市立長良小学校（ぎふしりつながらしょうがっこう）

みずのわ活動・みずのわ祭り

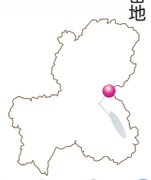
長良小学校には、「みずのわ」という活動があります。「みずのわ」とは仲良し活動を核に、自分たちのくらしを見つめ、高めていこうとする活動です。今年の活動は「長良っ旗づくり」。みんなで持ち寄った古着を縫い合わせて絵を描き、グループごとにオリジナルの旗をつくりました。活動の中で、6年生が「政治する力」を発揮し、全校の課題である「自分から仲間と向き合い、行動し続ける長良っ子」を目指しました。「みずのわ祭り」は、その集大成の場です。仲間とともに力を合わせて自らの手で学校を動かそうとした体験…その過程や結果に「仲良し」が育ち、「政治する力」がつくられていくと考えています。

2021.3
No.465
春風号
第72巻3号
3

［しらかわちょうりつさみしょうがっこう］

白川町立佐見小学校

●住　所　〒509-1221
加茂郡白川町上佐見487番地
●TEL　0574-76-2204
●児童数　34名



〈地域の自然や風土〉

佐見小学校は、国道41号線より飛騨川を渡ってJR下油井駅を通り、佐見川渓谷にそって、曲折の多い山道を約十六㎞登ったところにあります。本校は、昭和五十一年四月に上佐見小学校と下佐見小学校の学校統合により、東西に長く、山間部に広がる広範囲な校区です。

春に行われる地元の神社のお祭りでは獅子舞を踊ったり、夏は佐見川で鮎を釣ったりと地域の行事や催し物に積極的に参加しています。また、伝統的な佐見歌舞伎があり、子どもたちが参加し、伝統行事にも積極的に取り組んでいます。

校舎

学校の教育目標

「自らとりくみ輝く佐見の子」

〈めざす姿〉

◎さ：さわやかなあいさつのできる子
◎み：みんなで力を合わせて活動できる子
◎の：のびのびと考えを話せる子
◎こ：こつこつと最後までやりきる子

学校のたからもの①
地域の方々をおもてなし 佐見っ子まつり

全校児童で、もち米づくりをしています。五月に田植えを行い、約四か月を経て、五・六年生が稲刈りをします。今年は、七十kgの収穫ができました。例年は、このもち米を十月下旬の「佐見っ子まつり（家族参観日）」で餅をつき、子どもたちや保護者・地域の皆様と一緒に味わって食べます。また、PTAのご協力で、おいしい豚汁を食べることができます。農園の活動では、地域ボランティアの方々にお手伝いいただき野菜作りをしています。その畑で収穫した里芋やさつまいもなども入れるので、具だくさんの豚汁になります。

一・二年生はお店屋さんを開き、三・四年生は郷蔵太鼓を披露します。五・六年生は運営全般を行い、全校でお世話になった地域の方々や児童家族の皆さんをおもてなししています。

学校のたからもの②
伝統文化の継承　佐見歌舞伎

佐見歌舞伎は庶民の楽しみとして、江戸時代からはじまり、特に、昭和十年代に盛んに上演されました。現在は、二年に一度の開催となり、昨年は、十一月三十日、十二月一日と二日間の開催でした。毎年五・六年生が「白波五人男」を、佐見歌舞伎の歴史を勉強しながら、総合学習で学んでいます。この演目は、第九回公演（平成二十五年）より披露しています。市川福升師匠から教えていただき稽古に取り組みました。昨年は大舞台（二年に一度の開催）で、授業の成果としても大きな経験ができました。たくさんの方々の指導や支援のおかげで、無事に公演できました。佐見地区の伝統と文化を、これからも引き継いでいきます。

地域行事　5・6年生白波五人男

学習発表会　3・4年生神楽獅子

【児童の感想】化粧をして衣装を着ると、いつもの練習とは違う緊張感でしたが、がんばって練習してきて良かったと思いました。

全校児童と地域ボランティアの方々との田植え

運動会で一輪車の技を披露

家族参観日　1・2年生お店屋さん

家族参観日　3・4年生郷蔵太鼓

保護者の方の読み語り

学校のたからもの③
全校が読書好きになるために

昨年度、可茂地区館内の小・中学校における学校図書館教育賞審査がありました。その中で佐見小学校の図書館教育が認められ「最優秀賞」を受賞することができました。

全校児童が定期的に本を借りることができています。それは、図書バッグを持って登校する習慣がついているからです。学習での本の活用が増え、色々な分類の本を読むことが子どもたちに定着し、意識して借りようとすることができています。図書委員会では、毎週火曜日に「読書クイズ」と「キッズ新聞クイズ」を考えて、全校児童が楽しく図書館利用ができるようにしています。この取り組みについては、昨年度の美濃白川読書サミットで、図書委員が発表をしました。また、高学年、地域の方、保護者の読み語りを、子どもたちが楽しみにしているので今後も継続していきます。国語など特定の教科だけでなく、様々な教科で活用できるように、教科関連につながる図書を購入しました。（今年度は金銭教育の本が中心）教科の年間指導計画の中に、読書活動を位置付け（ブックトーク、並行読書、調べ学習）本の読み切りや多読の指導を継続しています。より自発的な読書を目指すために、ノーメディアデー家庭読書の日や朝読書以外にも、学校や家庭で時間を見つけて読書をする意識をつくるように考えています。

家族参観日　石臼での餅つき

美濃白川読書サミット　図書委員の発表

［なかつがわしりつにししょうがっこう］

中津川市立西小学校

●住　所　〒508-0011
中津川市駒場301番地の1
●TEL　0573-66-1355
●児童数　573名（11月10日現在）

〈地域の自然や風土〉

市の中心を流れる中津川の西に位置し、校区域は、旧駒場・旧手賀野の両村域とほぼ重なる地域です。校区には中山道が通り、昔の趣が残っています。豊かな自然に囲まれた地域です。

校舎

学校の正門にある校歌の碑

学校の教育目標

「豊かな心で 学び合い 鍛え合う子どもを育てる」

～もっとやさしく　もっとかしこく　もっとねばり強く～

はじめに

本校の校歌は、岐阜県出身の国語教育者であり児童文学作家である今井誉次郎氏が作詞をされました。その歌詞は地理的特徴や地名等には触れず、「輝く日本・世界を作ろう」「平和を築こう」、そのために「人の値打ちを生かそう」「働くことの意義を知ろう」「自由の心を育てよう」など、「どのような社会を築く人間に育ちたいか」「そのために何を学んでいきたいか」が丁寧に歌われており、本校の宝物の一つと言えます。しかし今回は校歌そのものではなく、校歌の一番から三番の歌い出しである「あつまれ」「わになれ」「がんばれ」にちなんだ宝物を紹介します。

学校のたからもの①

仲間が『あつまる』児童会活動

本校の宝物は何といっても元気いっぱいの子ども達です。夏の暑さにも冬の寒さにも負けず、いつでも仲間が集まり、元気一杯で勉強したり、遊んだりしています。そんな子ども達の活動の中心になっているのが児童会です。これまでの児童会が大切にしてきた四本柱「に（『に』こにこあいさつ）・し（『し』っかり掃除）・こ（『こ』ころがこもった合唱）・う（『う』ごきすばやく一分前）」をさらに高められるようにと、挨拶運動や歌声キャンペーンを企画したり、掃除名人を紹介したりしています。また、アルミ缶やタオルを集めたり、募金活動を実施して集まったお金を被災した地域に送ったりと、仲間の気持ちが『あつまる』活動を工夫して取り組んでいます。

校庭で元気に遊ぶ子ども達

児童会による募金活動

児童の登下校を見守る「見守り隊」

集会で見守り隊の方に感謝を伝える様子

PTAと児童会が一緒に行う挨拶運動

学校のたからもの②

地域が『わになる』見守り隊活動

本校の宝物の二つ目は、子ども達の登下校の安全を見守ってくれる地域の「見守り散歩隊」の方々です。子どもの交通安全を見守るだけでなく、一人ひとりに「おはよう」「さようなら」と声をかけたり、一緒に登校したりしながら、子どもの心も見守ってくれています。気になる様子があると学校と相談したり、直接声をかけたりしてくれます。そのような見守り隊の方と交流を深めるために、四月には見守り散歩隊の方を招いた「お願いします会」を、三月には「ありがとうございました会」を児童会が企画しています。お互いに自己紹介をしたり、手紙を渡したり、一緒に遊んだりして楽しい時間を過ごしています。この会をとても楽しみにしている見守り隊の方も多いようです。地域と学校が『わになり』、子どもを育てています。

環境整備作業の様子

学校のたからもの③

子どものために『がんばる』PTA活動

本校の宝物の三つ目は、多くの保護者が参加するPTA活動です。児童会と一緒に挨拶運動を行ったり、親子行事や絵本の読み聞かせ、お弁当の日など、子どもと保護者が一緒に体験する活動を企画したり、環境整備作業や機関紙の発行、成人教育講演会の企画等、多様な形態で参加できるよう活動を工夫したりしています。委員になった方だけでなく、絵本の読み聞かせボランティアや運動会会場の片付けの協力依頼があると、多くの方が積極的に参加してくれます。子どものために自分ができることを『がんばって』、活動しています。

成人教育講演会の様子

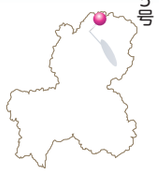
最後に

今年度は新型コロナウイルス感染拡大の関係で、何かと活動に制約が多い一年間になりました。しかし、西小学校の宝物がさらに発展していくように、児童・学校・保護者・地域が一緒になり、ピンチをチャンスに変えられるよう取り組んでいます。

[ひだしりつふるかわしょうがっこう]

飛騨市立古川小学校

●住　所　〒509-4222
飛騨市古川町片原町8番35号
●TEL　0577-73-2614
●児童数　437名



〈地域の自然や風土〉

岐阜県の最北端、飛騨市に位置する古川町は、自然豊かで伝統あふれる町です。特に、ここ飛騨市古川町で毎年四月十九日、二十日に行われる「古川祭」は「古川祭の起し太鼓・屋台行事」として国の重要無形民俗文化財に指定ならびにユネスコの無形文化財に登録され、日本三大裸祭の一つに数えられています。また、二〇〇二年には、朝の連続テレビ小説「さくら」の舞台として、二〇二六年にはアニメ映画「君の名は」の舞台として観光客が多く訪れました。

校舎

「心をそろえる」所作指導

感謝を伝える運動会
テーマ「こころ」

学校の教育目標

心豊かに　たくましく
未来を切り拓く
自分から　自分で　自分なら

はじめに

本校は、県指定史跡天守櫓台を含む増島城跡の上に建設され、伝統文化あふれる飛騨市古川町の小学校として、明治七年に始まり、大正、昭和、平成、令和と約百四十年の歴史をもちます。現在の校舎は平成二十二年に完成しました。新元号発表の際、揮毫を担当した茂住修身氏が本校の卒業者であることから、昨年度、来校いただくことができました。児童の目の前で書いていただいた、学校の教育目標「未来を切り拓く」を古川小学校の指針として大切に掲げています。また、昨年から茂住氏の書を原板とする「卒業証書」を手渡しています。

学校のたからもの①
願いや思いをもって「自分から」動き出す「古川小やんちゃっ子」

コロナ禍のなか、本年度の運動会開催について職員間で検討を重ねていたころ、六年生六名の代表児童が校長室にやってきました。「校長先生、話があります。今年の運動会、ぜひやらせてください。」と。そして、「六年生の思いをこの紙にまとめてきました。」と言って広げた模造紙には、六年生一人ひとりの思いが貼ってありました。自分たちの運動会を自分たちの手で開催したいという思いはもちろん、「家族に成長した姿を見せたい」「親に頑張っている姿を見せて安心させたい」「運動は苦手だけど、やらなかったら、コロナに負けたことになるから悔しい」等…。自分から動き出し、自分たちで学年集会を企画・運営し、自分たちならではの思いをまとめ提案してきた六年生の姿は、古川小学校がめざす主体的な姿そのものでした。開催当日は、様々な制限があったにもかかわらず、「感動的なすばらしい運動会だった」という多くの声をいただきました。このように「自分から」動き出す姿はまさに古川小のたからものです。

6年生表現　ぼくらの運動会～未来へ～

伝統芸能を学ぶ
雅楽演奏

地域の方から学ぶ食育指導

読み聞かせボランティア

農業の大切さを学ぶ
米作り体験

学校のたからもの②
「和のこころ」の教えをもとに、心をこめて行う「あいさつ」と「掃除」

九月に日本舞踏家を講師にお招きし、日本舞踊における知識や作法を学ぶ機会を設けました。すると礼儀作法や自分の気持ちをコントロールすることの大切さを学んだ子どもたちの姿に成長・進化が生まれました。まずは「あいさつ」です。毎朝、元気に大きな声でさわやかにあいさつを交わすだけでなく、目を合わせ、立ち止まってお辞儀をする姿が見られるようになりました。もうひとつは「掃除」です。これまでよりもさらに集中して取り組むようになりました。掃除が始まる直前に流れるオルゴールの音に合わせ、講師に学んだ、心を落ち着け集中する「気鎮め」を行い、静かに始まる古川小学校の「掃除」と心をこめて行うあいさつは古川小のたからものです。

学校のたからもの③
保護者・地域の皆様に支えられている「古川小やんちゃっ子」

地域の小学校として、保護者・地域の学校教育への関心は高く、クラブ活動や総合的な学習の時間の講師、読み聞かせボランティア、道徳授業および教科指導のゲストティーチャー等、本校の教育活動に対する積極的な支援があります。さらには、七月よりPTAによる、朝の見守り活動・検温・トイレ掃除のサポートボランティアを始めていただきました。

また、本年度より「飛騨古川に自信と誇りをもちたくましく未来を切り拓いていく古川やんちゃっ子を育てていきたい」という学校・地域・家庭の共通の願いのもと、学校運営の改善や未来の作り手となる児童育成を目的に、学校運営協議会がスタートしました。

おわりに

新型コロナウイルスの対応により、本年度は何事も計画通りには進められないことが多くありましたが、ここまで乗り切ってこられたのは、たくさんの保護者やご家族・地域住民のご支援、ご協力のおかげです。感謝の気持ちを心にとめ、今後も、子どもたちが日々の学校生活を笑顔で安心して送っていられるよう、努めてまいります。

茂住修身氏による書の実演

飛騨神岡高校ロボット部の実演

保護者ボランティア
によるコロナ対策

［かかみがはらしりついなばちゅうがっこう］

各務原市立稲羽中学校

●住　所　〒504-0927 各務原市上戸町5丁目40番地
●TEL　058-383-3356
●生徒数　304名

〈地域の自然や風土〉

本校は、木曽川と航空自衛隊岐阜基地の間にある静かな田園地帯に位置しています。昔ながらの三世帯家族が多く、祖父母の家庭における役割や影響がまだまだ強く残っています。また、国道21号線沿いに大型店舗があり、ここを中心に他地域との人的交流が見られます。さらに、平成二十五年度に「各務原大橋」が開通し、愛知県との人的、物的交流も盛んになってきています。保護者の方々は学校教育に理解を示し、学校との連携にも協力的です。地域の自治会や各種青年育成組織も、市民運動会・市民清掃・地域伝統行事などで中学生に役割を持たせ、地域社会人として育つように地域ぐるみで教育を推進しています。

校舎

本校の体育祭に校区の小学生が参加

学校の教育目標

「志を立て 夢の実現めざして 粘り強く挑戦する生徒」

学校のたからもの①

本校の伝統は「良さ見つけ」

本校は、生徒会を中心として仲間の良さを見つける活動を継続して行っており、それが生徒会活動の伝統の一つとなっています。本年度も、すべての生徒会活動において、活動を進めながら、活動を通して気づいた仲間の良さや良い姿を見つけ、広め、掲示しています。

一斉登校が始まってすぐに行ったのが「コロナに負けるな！笑顔の花満開キャンペーン」です。美術部員が模造紙一面にコロナのイラストを描き、その上から、仲間の良さや頑張りを書いたひまわりの形の用紙をコロナのイラストが見えなくなるまで貼りました。どの学級もひまわりがいっぱいになりました。七月からは「届けよう挨拶キャンペーン」「稲中人権宣言を意識して生活しようキャンペーン」「つなぎ発言を活発にしようキャンペーン」などを計画し、生活面や学習面での課題の克服のための活動を行いながら、その活動を通して見つけた仲間の努力や良さを記録に残しました。このように、継続して「良さ見つけ」を行うことで、生徒たちは、「現在の課題に向かい、役割を果たし、仲間と共に取り組み、さらに新たな目あてを生み出す」という流れを作っています。さらに、仲間からプラスの評価をもらえることで意欲が高まったり、集団での居場所を感じたりしています。

また、本年度は「仲間から見つけてもらった良さを自分のノートに記録しておきたい。」「仲間の良さをみつけるだけではなく、良さ見つけ活動を通して自分の良さや強みを見つけてほしい。」という生徒会執行部の声から「トレジャーボックス」という良さ見つけの記録ノートを作成しました。ノートには「〇〇さんは、数学係としていつも着席の呼びかけをして、責任を果たしていると思います。おかげでみんなが時間を守って着席できています。ありがとう。」などと書かれており、このノートの取組が、「相手を承認する」「相手を思いやる」「相手に感謝する」気持ちを育てていると感じています。三月を迎えた時、生徒たちは、ノートに書かれた仲間からのメッセージを読み、今まで気づいていなかった自分の良さを知り、自己肯定感につながればよいと考えています。

校区の小学校へ吹奏楽部の出前演奏会

学校のたからもの②

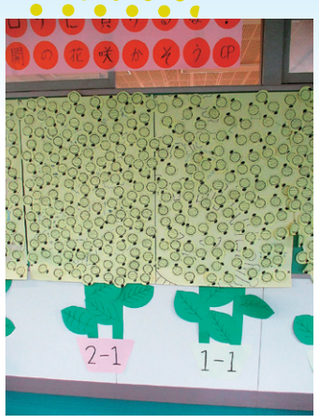
地域の力を借りて

稲羽中学校区の小中学校（稲羽東小学校・稲羽西小学校・稲羽中学校）は、各務原市の中で最も早くコミュニティスクールの動きをつくりました。平成二十九年度（一年間の準備期間を経て、本年度は、学校運営協議会が発足してから三年目になりました。

地域人材を活用した家庭科のミシン縫いや調理実習での実技指導などの「地域の方による学校教育への参加」、地域の清掃活動や行事への参加、標語づくりなどの「子どもたちの地域参画」、中学校の体育祭や合唱祭への小学生の参加、校区合同の子育て広場開催などの「学校間連携」を行い、地域ぐるみで教育を推進しています。さらに、本年度は三校共通の「自己肯定感・自己有用感づくりのためのあいさつ・ボランティア活動の推進、良さ見つけ」に力を入れていくことを学校運営協議会で確認し、地域に発信しました。コロナ禍で思うように活動は進みませんが、地域の方から「近所の〇〇さんが大きな声であいさつをしてくれた」「道に迷って困っていたら、自転車を止めて道案内してくれてうれしかった」などの生徒の良さに対する声を寄せていただきました。その声を全校で共有することで、地域の生徒を愛してくださる地域の方と触れ合ったり声を聴いたりして、その愛に触れ、生徒たちは日々成長しています。

ボランティア手帳50回達成認証　表彰

地域先生と調理実習「ハンバーグ作り」



「コロナに負けない！ 満開の花を咲かそう」取組

生徒会発案
良さ見つけの記録ノート
「トレジャーボックス」

地域先生とミシンの使い方実習

「仲間の小さな一歩を良さ見つけで応援しよう」取組

家庭学習ノート5冊以上達成
表彰

揖斐川町立小島小学校 PTA会長　細野 朋洋

わが家の宝物

わが家の宝物は、家族の笑顔です。家族の笑顔を見ると楽しい気持ちになりますし、毎日の活力にもなっています。私には十歳と七歳の二人の息子がいて、上の息子はおっとりタイプであまり怒らず、ニコニコしています。下の息子は活発なタイプで、人を笑わせることが好きで、冗談を言ったり変顔をしたりしては家族を笑わせてくれます。

最近、息子二人が大きくなり、叩き合い、蹴り合いのケンカをするようになりました。はじめは止めていましたが、ケンカは本音と本音のぶつかり合い、と思うようになり、気のすむまでケンカさせるようにしました。そうしたら、最後にはお互い謝って仲直りできるようになりました。ケンカするほど仲がいい、という言葉がありますが、ケンカをしていると思ったらいつの間にかケラケラ笑っている子どもたちを見ていると、本当にそう思います。

私の好きな言葉は「笑う門には福来る」。本音で話し合い、笑い合える家族関係をいつまでも大切にしていきたいと思います。

リレーエッセイ 13

安八町立登龍中学校 PTA会長
馬渕 佑司

私とPTA

私がPTA活動に携わるきっかけは、地域の先輩に誘われたことで、それ以来小学校で三年間、子どもの進学と共に中学校で三年間、計六年間活動させていただいております。

その間、様々な経験をさせていただきました。PTA役員として携わり、一番良かったと感じることは、子どもたちの成長をより身近なところで実感できることです。自身の子どもだけでなく、他クラス、他学年の子どもたちと接することで、子どもたちが日々成長していく姿が分かります。それはPTA役員として嬉しいことでもあり、とても頼もしく感じます。そんな姿を思い浮かべながら、行事を企画、運営してきました。

しかしながら、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、臨時休校に始まり、再開後も様々な活動において制約を受けています。学校行事等が延期、中止となり、一番辛いのは子どもたちでありますが、我々PTA役員、保護者にとっても残念なことです。でも、子どもたちはコロナに立ち向かい、現状の中で何が最善なのかを導き出す知恵と工夫を、大人以上に考えていると感じています。これは、先生方のご指導の賜物であると同時に、子どもたち自身が、将来への夢、未来への展望に向かって、とにかく前向きに考え、実行する推進力を自分たちで身に付けた成長の証だと思います。数少ない行事の中で時折みせるそんな子どもたちの姿には、先生方も感心されるほどで、本当に頼もしく感じます。

私自身も、これまでのPTA活動を通して、先生方、役員や地域の皆様と関わりあうことで、自身の考え方の幅が広がり、数多くのことを勉強させていただきました。子どもの成長のために活動することがPTAでありますが、実際は保護者自身も成長させてくれるのがPTA活動だと思います。

だからこそ、PTA活動に精一杯取り組み、子どもたちの成長と共に私自身も更に勉強し、成長していきたいと考えています。

次回は… 大野町立南小学校　飯沼 英樹さん

わが子のあゆみ
2021.3 No.465 春風号

もくじ

1 表紙　岐阜市立長良小学校
1 学校のたからもの　白川町立佐見小学校　中津川市立西小学校　飛騨市立古川小学校　各務原市立稲羽中学校
9 わが家の宝物　細野 朋洋
10 リレーエッセイ⑬　馬渕 佑司
11 特集 3・11を学びに変える【後編】
Smart Supply Vision／小さな命の意味を考える会　佐藤 敏郎
17 みんなで家庭教育！③・④　岐阜県環境生活部環境生活政策課
19 「多様性尊重の教育⑱」みんな、いっしょに　安田 和夫
21 保健室ノート　楠瀬 詩織
23 私の先生㊸　松野 正範
25 話そう！語ろう！わが家の約束　架場 貴文・松田 征児
26 先生！ありがとう！　保護者から先生へ贈る感謝の四〇〇字メッセージ　伊藤 洋雄
27 子育て半生記　西田 和久
29 楽しい読み聞かせ⑫　海津市立下多度小学校PTA
31 親の背中⑦　和田 邦弘・入山 麻美
33 私が出会った1冊の本【続48】　櫻井 佳代子・安藤 美和
35 子の思い　伊藤 蒼徠・牧野 晴愛・平野 凛太郎
親の願い　小川 明子・伊藤 国男
教育の窓　野村 修平・村木 秀昭
41 親子ではてな
42 お試しクッキング　岐阜県学校栄養士会
43 ふるさとの伝承　多治見市立南姫小学校
45 きらり！キッズ！　下呂市立東第一小学校
47 夢中！熱中！我らが部活　瑞穂市立穂積北中学校
49 私たちのPTA　垂井町立岩手小学校PTA

機関誌「わが子のあゆみ」
令和2年度　春風号
第72巻3号　通巻465号
発行／令和3年3月1日　岐阜県PTA連合会
〒500-8816　岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内
電話／058(262)3257
FAX／058(262)3259
Eメール／info@gifu-pta.jp
ホームページ／https://gifu-pta.jp
編集／岐阜県PTA連合会広報委員会
「わが子のあゆみ」編集部
印刷／サンメッセ株式会社

3・11を学びに変える［後編］

特集

Smart Supply Vision／小さな命の意味を考える会

佐藤 敏郎

東日本大震災当時は、宮城県女川第一中学校（現在の女川中学校）に勤務。震災後の2011年5月、生徒たちの想いを五七五に込める俳句づくりの授業を行い、2016年度の中学校1年生の教科書にも掲載された。震災で、当時大川小学校6年の次女を亡くす。2013年末に「小さな命の意味を考える会」を立ち上げ、現在は、全国で講演活動を行う。2016年「16歳の語り部」（ポプラ社）を刊行、「平成29年度 児童福祉文化賞推薦作品」を受賞。

土手の上

次女みずほの遺体が上がったと知らせを受けた三月十三日の夜、家にたどり着き、翌十四日の早朝、大川小学校に向かった。あるはずの堤防が消えていた。橋も途中で流されていたので車は通れず、小さな舟に乗せてもらった。舟から降りると周りはガレキに埋もれていて、土手には泥だらけの子どもたちが数十名並べられていた。あの光景は忘れられない。忘れてはいけない。

みずほも一緒に並んでいた。名前を呼べば目を覚ましそうなのに、いくら呼んでも、揺り動かしても、目を覚まさなかった。私たちが声をかけたら、右目から泥と一緒に涙が流れた。「6年佐藤みずほ 母親確認」と書いた布を胸に縫いつけて、軽トラックに運んだ。小さな遺体が次々に乗せられた。この場合は「載せられた」と書くのだろうか。

卒業式が間近だった。式で歌う合唱のピアノ伴奏者になり、毎日練習していたみずほ。中学生になるのが楽しみだったみずほ。11日の夕方は、おじいさん、おばあさんと制服をとりに行くことになっていた。卒業式だったはずの十八日に火葬が行われた。みずほの目からは、その日まで毎日涙が一筋流れた。

全校児童一〇八名のうち七十四名が犠牲になった（死亡 七十、不明 四）。校庭にいて助かった児童は四名だけ、教員も校庭に十一人いて十名が亡くなった。あの日学校管理下で、多くの児童・教員の犠牲を出したのは大川小学校以外にない。

何があったのか

十四時四十六分、大きな揺れが数分続いた後、津波は、家、車、土砂、そして、海岸にあった数万本の松を巻き込んで北上川を遡ってきた。それらが新北上大橋に堆積し、水位が上昇。一気にあふれ出た。流れをせき止めた分、津波は威力も波の高さも大きくなったと思われる。橋は四分の一ほど流失、堤防も決壊、その後、陸を遡上してきた津波も到達し、川からの津波とぶつかり、校庭で渦を巻いた。校舎内の時計は、すべて十五時三十七分で止まっている。地震発生から五十一分後である。

校舎から出て校庭に整列して間もなく防災無線やラジオが大津波警報を伝えた。かつてない緊迫した口調で避難を呼びかけていた。

体験学習で毎年登っていた緩やかな傾斜の山が目の前にある。カーラジオを聞きながら迎えに来た保護者は、急いで山へ避難するよう教師に進言し、子どもたちも必死に山への避難を訴えていた。無線連絡を受けたスクールバスも方向転換を済ませていた。しかし、校庭待機は続き、避難を開始したのは津波が襲う一分前だった。山ではなく、津波が襲ってきた川に向かって。通ったのは狭い道でその先は行き止りだった。一体、何があったのか。

大川小校庭 津波到達までの51分間

14:46 地震発生
震度6の揺れが約3分間続いた。

14:49 校庭避難
校舎から出る際先生が「津波が来る、山に逃げるぞ」と声をかけたので、山に向かった児童もいたが、まずは校庭に整列。

14:52 大津波警報
ラジオ・防災無線から緊迫した放送。スクールバスは出られるように待機。

15:00 頃まで
地域の人や児童、迎えに来た保護者も山への避難を進言。

15:25
市広報車が高台避難を呼びかけ通過。

15:36 移動開始
橋のたもとへ向かったが行き止り。

15:37 津波到達

小さな命の意味を考える

学校で多くの児童の命が失われたというのに、石巻市教育委員会は説明会を開こうとしなかった。約一ヶ月後にようやく行われた説明会で、私たちは「地震でバキバキと木が倒れてきて、山に避難できなかった」と説明を受けた。ところが木は一本も倒れていない。その他も事実と矛盾する説明ばかりだった。しかも、議事録さえ残さなかった。どこをどう考えても「意図的な嘘」である。それ以外の言葉は当てはまらない。

その後の経緯を書くと、膨大な字数になってしまうので省くが、市教委は言い訳するためにまた嘘を重ねなければならず、指摘を受けどうしようもなくなると常套句が繰り返される。「重く受けとめます」「今後検討します」「資料は廃棄しました」「担当者が代わりました」…。生き残った子どもたちが懸命に話してくれた証言でさえ「子どもの記憶は変わる」と、まともに取り上げてくれない。津波よりこっちの方が恐ろしい。

二〇一二年十一月、文科省が主導して立ち上げた第三者検証委員会も、事実の解明とはほど遠い状況のまま、時間と予算を費やして終了した。報告書の中に、監視カメラや簡易地震計を設置すべきとの提言があったが、それがなければ子どもは救えないのだろうか。

何をしても命は戻らない。だからと言ってごまかしてはいけない。安全だと思っていた学校で我が子を失った上に、その命が嘘で説明されるのは嫌だ。遺族だから、教員だからとか思われているかもしれないが、そういう次元でもない。遺族でなくても教員でなくても、おかしいものはおかしい。

子どもを守りたくない教師はいない。あの時、先生はみんな一生懸命だったのは間違いない。でも救えなかった。五十分校庭にいて動かなかった。黒い波を見たとき、彼らは「〇〇すればよかった」と、きっと後悔したはずだ。その後悔を考えることが検証である。「監視カメラを設置すべきだった」なんて思うはずがない。

そして、警報が鳴り響く恐怖感の中、寒い校庭でじっと待っていた子どもたちから目を背けないでいきたい。黒い波に飲まれていった小さな命たち、それは守れたかもしれない命なのだ。命を真ん中にした話をしたい。防災、心のケア、組織のあり方、訴訟、検証委員会、切り口がたくさんあるので、整理して取り組む必要がある。ただ、たくさんあって複雑なのも大川小事故の特色でもある。こじれているという問題も考えたい。

二〇一三年十一月に、大川小で起きたことの考察、思いを多くの皆さんと共有したいと考え、「小さな命の意味を考える会」を作った。命は地球がちょっと震えただけで簡単に消えてしまう小さくて弱いものだが、意味は大きく深く重い。

誰もが目を背けたい、耳を塞ぎたい出来事だとしても、組織や立場を超えて向き合うべきだ

と思っている。当事者しか分からない内容ではなく、深く考えるけど難しい言葉ではなく、曖昧にはしないけど悪者捜しではなく、悲しいけど未来志向で。

未来をひらく

学校でこれだけのことがあった。忘れてほしくない。覚えていてほしい。だからテレビや新聞の取材は断らないで誠心誠意対応しようと思っている。一方で、そのテレビや新聞を誰にも見てほしくない気持ちもある。めでたいこととか格好いいことでテレビに出るわけじゃないので、自分でもよく分からない。十年も経つのにいつまでやっているんだときっと言われているだろう。

それに、どんな発信をしても「遺族が騒いでいる」とやはり言われる。だからといって遺族以外の人が「これは大事だからちゃんと考えましょう」と言うと「遺族じゃないのに騒いでる、関係ないだろう」という声があがる。結局誰も言わなくなり、やがて曖昧なまま忘れられていく。「何年か前、たくさん子どもが亡くなった学校あったよね」「どこだっけ」「なんでだっけ」「え、そんな学校あったっけ?」「まあいいか」となってしまう。往々にしてあることだ。

あの出来事に、あの命に意味づけをしたい。それができるのは生きている私たちだ。大川小と聞いて浮かぶのは「悲しい」「かわいそう」「悲惨」「みじめ」といった言葉。たしかにその通りだ。でも、それだけだったら好き好んで話したくもないし、聞きたくもないだろう。一かけらでもいい、未来につながる何かがここから生み出せないものか。

大川小の校庭には子どもたちが描いた壁画があって、その真ん中に「未来を拓く」と書いてある。津波もここは壊さなかった。大川小の校歌のタイトルだ。「大川小ってどんな場所?」と聞かれたら「あ、あそこは未来を拓く場所だよ」って答えてもらえるような状況をつくりたい。これを読んだ皆さんも、誰かに聞かれたらどうかそう答えてほしい。

この場所から拓く未来は、あの日の校庭、あの日の命から目を反らすことではなく、向き合ったその先に見えてくる。小さな命たちが未来のために意味を持つことは、3・11からの短いような長いような、止まったような時間の中で、ようやくたどり着いたかすかな光だ。まだまだ遠くの光だけれど、私たちの向かう先で子どもたちがニコニコ笑っている。

光にたどり着く道は、簡単には見つからない。もしかすると、作らなければ道はないのかもしれない。みずほは、私のおやじギャグに必ず反応してくれた。「おいおいっ」とか「つまんねー」とか言いながら。「もういい加減にしたら?」って言われてそう。でもやめない。「お父さんらしいなぁ」と見ていてほしい。半分あきれて、苦笑いしながら見ていてほしい。

念のためのギア

現地を案内する際、校庭脇の山に登ってもらうが「登れない、無理だ」と言った人は一人もいない。でも、山がエレベーターになったり、飛行機になったりするわけではない。命を救うのは山ではなく、山に登るという判断と行動だ。立派な救命ボートがあっても、それを水に浮かべて、乗らなければ助からない。時間も山もバスも避難マニュアルもハザードマップも訓練も、いらない訳ではない。それらが判断と行動に結びつけることが重要なのだ。

緊急時の判断と行動とは何か、それは「念のため」だ。津波は目の前に来てからでは逃げられない。あの日助かった人は念のために行動した人だ。見えないけれど、遠いけれど、誰も逃げないけれど念のために逃げた人が助かった。じゃあ、三百六十五日一〇〇m高いところにずっといなければならないのか?違う。念のためにはギアがある。いざという時にギアを早く高く入ればいい。

子どもにとって、学校はたまたま通りかかった場所ではないし、教師はたまたま居合わせた大人ではない。念のためのギアは一般と同じでいいはずがない。あの日、子どもたちを救えた最大の要素は「学校にいた」ことだと思う。

「情報」と「時間」が十分あればより正しい判断が可能になる。でも、その二つが足りないのが「緊急時」である。意思決定が遅ければ遅いほどパニックになり、正しい判断が難しくなる。

	避難行動	津波到達	助かった
A	した	した	○
B	した	しない	○
C	しない	しない	○
D	しない	した	…

避難行動までの議論は二つの段階がある。すなわち「逃げるかどうか」そして「どこに逃げるか」。この二つの議論を早く行わなければならない。避難マニュアルがきちんと共有されていれば、この二つないし一つは省くことができる。

大川小学校のマニュアルには「津波のときは近くの空き地か公園に避難」と書かれていた。ところが、近くには空き地も公園もない。しかも、そのマニュアルを校長はじめ教職員は知らなかった。だからあの日は「逃げるかどうか」がなかなか決まらなかったのだ。この遅れがパニックにつながり、判断ミスにつながった。もし「津波警報のときは○○に避難」ということが職員間で共有できていれば、意思決定はもっと早くなったはずだ。

実体のない、誰も知らないマニュアルが毎年市教委に提出され、職員室の戸棚に入っていた。そのような学校は大川小だけだったのだろうか。防災に限らず「提出するため」に作っていた文書や計画は、私の教員生活の中にも少なからず思い当たる。

あの日の学校の動きは大きく分けて四通り。A「津波が到達したため避難した」B「津波が到達しなかったが避難した」C「避難しなかったが津波が到達しなかった」D「避難せず津波が到達」。D以外はすべて助かっている。

同じ結果ではあるが、学校として「あるべき対応」はどうだろう。Dの大川小も津波の動きによってはCだったはず。Cは何かのきっかけでDになったかもしれない。助からなかったのは「津波が襲ったから」ではなくて「避難しなかったから」なのだ。津波を止めることのできない私たちにできるのは、一秒でも早く、一mでも高い場所に向かうことだけだ。

ただし、想定外の津波（災害）のまっただ中に冷静さを保つのは不可能だと考えた方がよい。次の二校は平時の備えが功を奏した事例である。いずれも石巻市内の学校だ。

相川小学校は、以前は三階の屋上が避難場所だったが、三階を津波が越えた場合それ以上逃げられないということで山（神社）に変更した。三階は越えるはずがないという意見もあったが、念のために変えたのだ。3・11は三階を越える津波が到達したが、山に逃げて無事だった。議論をしたので、職員全員がマニュアルを共有できていたのも大きい。

門脇小学校は「九十九%地震・津波が来る」という宮城県の想定を受け防災体制を見直し、平成二十年度より引き渡し訓練も開始。当初は保護者から「忙しいのに面倒だ」等の声も多かったが、繰り返すうちに定着し、意識も高まっていった。

あの日校舎は津波が到達、火災も発生したが、校内にいた児童はその前に訓練通り迅速に避難。引き渡しも、校庭ではなく高台の避難先で行うことになっていたためスムーズだった。教員も児童もふだんの生活が命を救ったと話している。

二校とも「津波に追いかけられた」的なドラマ性はないので、あまり報道などには取り上げられないが、むしろ学校防災のあるべき姿だと思う。

判決は、けっして学校に無理難題を要求したものではない。マニュアルに「避難場所は○○の高台」とわずか一行記入するために求められるのは、長時間の会議、難しい研修、形だけの分厚いマニュアルではないだろう。問われているのは、平時から学校が「子ども」を向いて経営されているのか、それ以外の方を向いたものなのかどうかだ。もしもはいつもの中にある。

スタートライン

二〇一九年十月、最高裁が市・県の上告を棄却し、提訴から五年七ヶ月を経て判決が確定した。石巻市はそれを受け、十二月一日に謝罪と

説明会を行い、テレビ・新聞で、遺族を前に頭を下げる市長の姿が映し出された。まるで「遺族が頭を下げさせた」みたいだが、遺族からすれば「急に石巻市に呼び出された」会である。出席できない遺族の方が多かった。議会を前に、慌てて設定したことがうかがえる。

議会対応のための形式的なものだとしても、ただのパフォーマンスにしてはいけない。この会で大きかったのは、市長・教育長が「はぐらかさない・ごまかさない・途中でやめないと約束した」ことだ。九年の経緯を思えば、これがどれほど重大なことか理解していただけるだろう。だから「閉ざされていた対話の扉が開いた」という報道もあったが、それはまだである。たしかにゼロから一になった感覚はある。でも、その一は、ほんとに小さなもので、扉が開くかもしれない爪先ほどの隙間だ。その隙間さえ今まではなかったのだ。

説明会終了後、大川小学校へ向かい、市長・教育長はじめ、市、県の教育関係者が子どもたちと先生方に手を合わせた。その後、校舎内外を案内したのだが、いつの間にか子どもたちが集まってきて、手を引いてくれている感覚になった。「市長さんやっと来てくれたね、こっちが教室だよ」

「教育長さん、このホールで歌ったんだよ」「ほら、ここまで津波が」「こっち、こっちだよ」…。

判決により「責任の所在」は明らかになったが、事故をふまえた取組はこれからだし、その検証は検証委員会が途中で投げ出したままだ。何といっても、市長が校舎に入ったのはこのときが初めてだ。子どもたちが学んだ教室も、二階の天井の津波の跡もやっと見ていただいた。遅いのか早いのか分からない。いろんなスピードで、いろんな動きがあって当然。多くのことが積み重なって現在地点がある。

前日もボランティアの皆さんが清掃に来て、花も植えられていた。ガレキに埋もれたあの日から、たくさんの方々の手によって学校はいつもきれいで、誰もゴミを落としていかない。子どもたちはそれも伝えてほしいようだった。

けっして交通の便は良くないのに、多くの方が足を運ぶ。清掃をし、花を植える。数えきれない数のメッセージも届く。九年前ガレキに埋もれていたこの場所から、一方通行ではない響き合うような動きが広がっている。

今年（二〇二〇年）、宮城県の新任校長の研修会が大川小学校で行われることになり、案内を依頼された。十一月四日、十年目の校庭に宮城県の校長先生方が九十名以上集まった。知っている顔も多かった。何を話しても、いや、話さなくてもみんな分かってくれたと思う。最後に「明日学校に行ったら、子どもたちに『大川小に行ってきたよ』と話してください」とお願いした。ずっと言いたかった言葉だ。

十年目で初めてこの場が設けられたことと、五十分間校庭で動かなかったあの日の校庭は、同じ構図のようにも思える。教師が、シンプルかつ丁寧に命に向き合うこと、それが十分に出来ていない状況があるのであれば、どうか変えてほしい。

「あ、校長先生がズラッと並んでるぞ。」風の音や工事の音に紛れて、ひそひそ話が聞こえた気がした。

ここは遺族だけの場所ではない。むしろ遠くの人、未来の人のためにこそ意義を持ち始めている。数十年後の人はここを訪れて「昔の人はなぜここを遺したんだろう」と思うはずで、そこに届く言葉、活動がきっとある。

たくさんのただいま

宮城県は九十九％地震が来る、津波が来ると言われていた。ハザードマップを見て、マニュアル作成、訓練…、様々な対策を考えたが、私は想定の中に娘を入れていなかった。

すごい災害が起きる、何万人も犠牲になる想定が示されても、自分は大丈夫だろう、ここまでは来ないだろうと考える人は多い。それは、防災が恐怖をあおっているからではないだろうか。

防災は助かるためのものだ。津波はたしかにすごい威力だが、山に登れば助かる。山の上でみんなで喜ぶ「ハッピーエンドの未来まで想定しきる」のが防災なのだ。私たちや娘の体験が、恐怖を希望に変える小さなきっかけになったらいい。

垣根を越えて、命を真ん中にした対話をしたいとずっと思ってきた。前例がないのだから、違う立場や意見は必要なはずだ。ところが、今までと違うことやみんなと違うことはなかなか言えない。対立するから、孤立するからだ。

違う意見はハモればいい。対立ではなく調和。ハモるのは同じ音を出すことではない。自分の音をブレずに出して周りの音もちゃんと聞く。そしたらドでもミでもソでもない新しい和音が生まれる。でも難しいので、でかい音を出して他の音を潰す、耳を塞ぐ、口を閉じる、面倒だから他と同じ音にする…となりがちだ。おかしいと思っても誰も言わない。大事なものが第一優先にならない。そうしているうちに取り返しがつかなくなる。

あの日の校庭もそうだったのかもしれない。

娘は習字が好きだった。勉強机の脇に習字用具入れがあって、開けてみたら中には「旅立ち」と書いた習字がいっぱい入っていた。最後に一生懸命書いた習字は「旅立ち」。当時はコンクールのために練習していた三文字だが、今になってみると私たちへのメッセージになった。今頑張っていること、悩んでいること、ぶつかっている壁…、ほんとうの意味や役割が分かるのはずっと先なのだと思う。ノックし続ければいつか扉は開く。熱は伝わり、やがて溶かす。すぐじゃなくていい。

大川小の校舎は二階の天井まで津波をかぶり、今も雨風が当たり、十年近く経っているのだが、廊下の名前のシールが真新しく残っている。今でも登校しているみたいだ。

これは新学期に担任の先生が貼るシールだ。一枚一枚名前を覚えながら、今年はこんなクラスにしたいと願いながら貼る。私もそうだった。だから残っているんだと思う。日本中の先生に知ってほしい。今年の新学期、なかなか登校できない日々の中、担任の先生はいっそう思いを込めてシールを貼ったはずだ。

二〇一一年、段ボール紙で仕切られた避難所から、ガレキの中をバスに揺られ、生徒は毎日学校に来た。「おはよう」と声をかけながら「おかえりなさい」と心の中で言っていることに気づいた。学校は普段からそういう部分が必要なのだと思う。

震災を経て、私自身大きく変わったのは生徒へのまなざしだ。生徒一人ひとりが「命」に見えるようになった。以前はそうではなかった。生徒はチャイムが鳴れば席に座っているものと思っていて、ほんとうにかけがえのない存在として見ていなかった。「命を大切に」「かけがえのない命」といった言葉を何度も使っていたけれど、どれほどの思いで口にしていたか。「命」には生んで育ててくれた存在があって「行ってらっしゃい」と送り出す存在がある。そして、たった一つしかない。今日も「命」が鞄を背負って学校に来る。「命」が授業を聞いているのだ。

命は3・11に急に大切になったわけではない。希望、絆、感謝もそう。千年に一度の出来事を通して見えてくるのはけっして特別なことではなく、むしろ普遍的なことである。そのことに気づかないと、今全国で取り組もうとしている防災教育も行き詰まっていくだろう。学校とは、教師とは本来どうあるべきなのか、私はあの日から自問し続けている。

生徒一人ひとりが「命」に見えたとき、授業は変わり、学校は変わる。学校は子どもの命を守り、輝かせるところだと多くの人に伝えたいと考えている。

防災は「ただいま」を言うこと。あの日言えなかった、聞けなかった「ただいま」がたくさんある。どんなことがあっても必ず家に帰りついてほしい。今日も世界中で元気な「ただいま」が響き渡りますように。

家庭で子どもに教えたいことや、育みたい力など、
家庭教育のヒントになる情報をお伝えします！！

みんなで家庭教育！

子どもたちが生きる未来

～今、何を教え、育んでいくことが大事なのか～

一 予測が難しい未来

新型コロナウイルス感染症により非接触社会・ネット社会が進み、食事をデリバリーすることも増え、宅配を専門にする企業も現れました。ネットショッピングでは、AIがその人の購入歴などからお勧めの物を紹介し、商品の発送には、ロボットが人間の代わりに働いています。無人レジ・無人コンビニも増えてきました。今後、AIやロボットに代替される職業やなくなる職業も出てくるでしょう。また、異常気象による自然災害、国際間の争いなど、いつどのように変化してもおかしくない社会となっています。しかし、今回のコロナ禍のように人間の活動が制限されても、子どもたちの成長の機会は待ってくれません。先の見えない将来に向けて、今、子どもに、何を教え、育んでいくことが大事なのでしょうか。

二「折れない力」をつける

最近、「持続可能な社会を目指して」とよく言われますが、我が子にも社会がどう変わっても生きていける「持続可能な人間」になってほしいのではないでしょうか。そのためには、子どもに「折れない力（レジリエンス）」を付けることです。失敗したからもう終わりではなく、失敗しても、もう一度やればよいと思えるように、結果でなくその過程を評価することです。まずは、家族の一員としての仕事や役割をもたせることが大切です。

具体的な行動がなければ、成功も失敗もなく、子どもの気持ちも育ちません。靴そろえや風呂掃除などの仕事の他、例えば、どこか旅行に行くときに、その計画の一部を考えさせることもできます。失敗をしても、非難せず、それまで取り組んできた過程（努力）を評価し、うまく行かなかったらその改善点を一緒に考え、さらに成長できるチャンスをどんどん作っていくのです。

三「得意なこと」を見つける

また、子どもの得意なこと・好きなことを見つけることです。子どもが夢中になっているものは、それが保護者の分からないものでも理解しようと努力し、邪魔をしないことです。夢中になるということは、強制されたこととは違うので、高い集中力と持続力で取り組んでいるはずです。「努力は夢中に勝てない」のです。そして、子どもの得意なこと、好きなことがはっきりすれば、世の中で行われている例を教えたり、その体験を増やしたり、同じような取組をしている人を紹介したりして、刺激を与えることがさらなる成長の鍵となるでしょう。

四「得意なこと」で支え合う社会

昭和の音楽史を代表する古関裕而の生涯をもとにした連続テレビ小説「エール」では、主人公の音楽の才能を発見した小学校の先生が「得意なものが見つかったんじゃないか?」と主人公に問いかける場面があります。「人よりほんの少し努力することが辛くなくて、ほんの少し簡単にできること。それがお前の得意なもんだ。見つかれば、しがみつけ！必ず道は拓く！」この言葉が主人公の将来を決定付けました。

また、主人公の妻となる人が、小学生時代に、劇の主役ではなく脇役となったくやしさから、「だれでもできるセリフだよ！」とお父さんに言う場面があります。その時のお父さんの言葉はこうでした。「人には、みんな役割がある。だれもが主役をやれるわけじゃない。だけど、主役だけでもお芝居はできん。必ずそれを支える人がいるんだ。」

素晴らしい才能を生かして世界的に活躍する人、社会の一翼を担う仕事に就く人。得意を職業にできるのは、ほんの一握りかもしれません。しかし、「特別には見えない才能」でも、他を支えることで大いに役に立つことがあるでしょう。その才能は地域社会で頼りにされるかもしれません。人生に彩りをそえる趣味となるかもしれません。

みんなが、それぞれの得意を出し合えば、まわりが楽になります。「働く」とは、「はた（傍＝他者）」を「らく（楽）」にすることだと言われます。人は、得意なことで誰かを助け、得意でないことは得意な誰かに助けてもらいながら生きていくのです。

社会の変化によって、必要な知識や技術は変わっていくことでしょう。しかし、どう変わっても、「折れない力」をもち、「得意なこと」を生かしていくことで、未来を生き抜いていけるのではないでしょうか。

西濃県事務所 家庭教育推進専門職
酒井 俊亘

家庭教育はコミュニケーション

一 家庭教育の始まり

赤ちゃんと親との間に結ばれた絆のことを「愛着」と言います。おなかがすいたと泣けば、ミルクがもらえる。おしっこしたと泣けば、感づいておむつを替えてくれる。暑い夏でも、抱っこしてくれる。

愛着は、このような赤ちゃんと親の様々な関わり合いを通して生まれます。

そして、自分のことを一番に考えてくれる親への愛着から、親を信じる心が生まれ、さらに、人を信じる心が育まれます。この心は一生にわたって、人間関係の土台となります。

関わり合いの中でも大切なことはスキンシップです。各地域で行われる乳幼児学級の取材に行くと、どの学級でも、親子でスキンシップを取ることが大事にされています。手をさする、握る、おなかをなでる、添い寝する、子どもの目を見て（アイコンタクト）にこやかに話しかけるなどです。高い高いや肩車等の活発な動きのスキンシップもあります。スキンシップの取り方は様々ですが、そこにある赤ちゃんと親とのコミュニケーションが大事なのです。

二 親子のコミュニケーション

コミュニケーションとは感情や思考などを互いに伝え合うことです。一方通行ではありません。

先ほど挙げた「愛着」を生み出す赤ちゃんと親の関わり合いについて見てみましょう。赤ちゃんが泣くとミルクをあげたり、おむつを替えたりと親が赤ちゃんの世話をします。親が赤ちゃんの世話をすると、赤ちゃんは泣き止んだり、笑ったりします。働きかけと反応、これがコミュニケーションです。子どもは、そこから多くのことを感じ、心が育まれていきます。泣いていても親から何の反応もないと赤ちゃんは、自分は放っておかれる存在なのだと感じてしまいます。

スマートフォンは気をつけて使わないと、このコミュニケーションを妨げてしまいます。画面を見ることに集中して、赤ちゃんの様子の変化に気が付かない親。スマートフォンの映像を見ておとなしくしている赤ちゃん。親と子、どちらからの働きかけも、反応もありません。

でも、スマートフォンそのものがいけないわけではありません。例えば、一緒に映像を見ていれば、「面白いね」「鳥がいるね」と親が赤ちゃんに語りかけることができます。赤ちゃんは自分と同じ物を見て、同じように感動してくれる人の存在を感じることでしょう。さらに、赤ちゃんは、語りかけられることで言葉を学んでいきます。

赤ちゃんに言葉をかけるときには、目を見て親の表情を見せていきたいものです。こうすることで、赤ちゃんはコミュニケーションの能力を伸ばしていきます。

三 家族のコミュニケーション

先日子ども館の育児講座を訪問しました。講師は「子どもが幸せになるためには、自己肯定感が高まるということが大切です。その為には、子どもをそのままを受け入れることです」と話されていました。

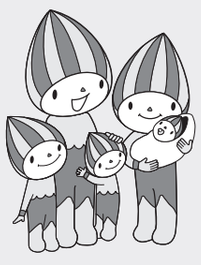
しかし、そのように子どもに接していくには心のゆとりが必要です。子育て中のお母さんは忙しいのです。掃除、洗濯、食事の準備、授乳、さらには仕事をしている方もいらっしゃるでしょう。

家事や仕事、子育てについて、思ったようにできないと自分を責めてしまいがちですが、少し肩の力を抜いてみてください。自分だけですべてを引き受けてしまうのはとても大変なことです。

まずは、身近な家族に、家事や子育てが大変だということを伝え、協力してもらいましょう。子育てについて家族でコミュニケーションをとることはとても大事なことです。父母、祖父母、みんなで子育てです。

今から三十年近く前のことです。私の子どもが生まれ、自宅に妻子で帰宅したときです。妻が食事を作ろうとしました。それを見て私の母（子どものおばあちゃん）が急に「あんた（私）何しとんの！食事ぐらい自分で作りなさい！」というのです。びっくりした私にすかさず母は「子どもを産んだ女性がどんなに体が弱っているのか知らないの！」と言われてやっとわかりました。母の言葉に感謝です。

家族だけではありません。友達、地域の方、行政の相談窓口の方、子育てに協力してくださる方はたくさんいます。家族をはじめ、身の回りにいる多くの方々と子育てについて積極的にコミュニケーションを取っていくことが、結果として、それぞれの親子の豊かなコミュニケーションにつながっていくのではないかと思っています。



環境生活政策課 家庭教育推進専門職
河野 和彦

【多様性尊重の教育⑱】シリーズ
みんな、いっしょに
「ふつう」ってなに③

だれでも参加できる「スポーツ」環境の整備

岐阜聖徳学園大学教育学部特別支援教育専修 教授　安田 和夫

前回の東京オリンピックのレガシー

今年の夏に延期された東京オリンピック、パラリンピックですが、コロナ禍の中で、実際に実施できるのか心配なところです。

さて、一九六四年に開催された前回の東京オリンピックは、様々なレガシーを残してきたことは有名ですが、現在にも、その多くが輝きを放っていることに注目する価値があります。

そのひとつが、オリンピック閉会五日後に「国際身体障がい者スポーツ大会」第二部として開催された、愛称「パラリンピック」でした。それまで、障がい種別ごとに開催される国際大会はあったものの、様々な障がいのある人が一堂に集まって競技を行う現在の「パラリンピック」の原型がここに示されたのでした。この大会は、非公式であり、かつ、国内の各都道府県から選手が集まってくるものでしたが、その理念と「パラリンピック」という愛称が世界から認められていったのです。この大会の「開幕式」で選手入場の際に流された曲は、坂本九さんの「上を向いて歩こう」だったそうですが、まさに、障がいのある方々やご家族、関係者に大きな夢と力を与えるものになったことでしょう。

そして、もうひとつ、ご紹介したいのが、スポーツ少年団の設立でした。今でこそ、スポーツ少年団といえば、どの町にもありますが、当時の日本は、めざましい科学技術の進歩や経済発展により生活水準が高まり、豊かさを取り戻していく過程にありましたが、学歴偏重の機運が高まる中で、様々な社会問題が顕在化し、子どもたちの心と体の成長にも影響が出始めていました。そこで、東京オリンピックに対する期待が高まる中、「一人でも多くの青少年にスポーツの喜びを…」「スポーツを通して青少年のからだとこころを育てる組織を地域社会の中に…」と願い、一九六二年六月に財団法人日本体育協会創立五十周年記念事業として、創設されたのでした。

当時のスポーツ少年団と現在の状況

スポーツ少年団の創設は、新たに、体育・スポーツを通して青少年の健全育成を願う「セーフティネット」が生まれたことになりました。

私は、一九六六（昭和四一）年四月、小学五年生の時に、地元の「大垣市健民少年団」に入団しました。現在のスポーツ少年団は競技種目ごとに細分化されていますが、当時、青少年活動といえば、子ども会、ボーイスカウト、健民少年団しかありませんでした。「健民少年団」と聞いても、皆さんにとっては、何をやる団体なのか想像がつかないかもしれませんが、野外活動、集団レク活動、軽スポーツなどを中心とする総合的なスポーツ活動で、今でも思い出される代表的な活動は、野営活動（キャンプ）やハイキング、手旗信号の練習などでした。小学生時代の私は、「白雪坊や」と先生から呼ばれるほど色白の顔で、みんなの前では話すとすぐ顔を赤らめてしまうあがり症でした。しかし、少年団に入ってからは、積極的に仲間と関わることが多くなり、少しずつですけれども、自分に自信がついていったように思います。こうして、私のように、少年団は、誰でも入ることができる自分の居場所であり、自己実現の場でもありました。

しかし、このスポーツ少年団はいま大きな曲がり角に差し掛かっています。今から十年前、全国の団員数が約九十万弱だったものが、現在は、すでに六十五万を割っています。特に、今年度は、コロナ禍にあって、団員募集も十分できず、どの都道府県も減少幅が大きくなっています。これは、少子化だけではなく、競技力向上を最優先にするクラブチームをはじめ、スポーツ団体が多様化してきたことや、スポーツ少年団を支える指導者が不足してきていることも大きく影響していると思われます。

「スポーツ少年団」だからこそ

数年前、スポーツ少年団に加入している団員の中に、障がいや疾患など様々な困難さを有している子どもがどのくらいいるのか調査をとったことがあります。すると、発達障がいをはじめ、肢体不自由や病弱の子どもたちが団員として活動していることがわかりました。

多くは、個人種目で、剣道、柔道、空手、合気道や、陸上競技などでした。しかし、団体種目の中にも、入っている団員もいました。そこには、地域や少年団の温かな雰囲気に加え、何より指導者の理解と支えがありました。

競技力、勝敗は、スポーツをやるうえで、極めて重要な要素ではありますが、すべてではありません。競技力の優れた仲間から学ぶこともあれば、コツコツ努力している仲間から学ぶこともあります。勝つことから学ぶこともあれば、負けることから学ぶこともあります。障がいや疾患のある仲間と競技することから、新たな発見を見出すこともあります。

もうひとつのオリンピック

最後に、もうひとつのオリンピック。「スペシャルオリンピックス」をご紹介します。これは、知的障がいや発達障がいなどの青少年の国際的なスポーツ団体です。岐阜県にも支部があり、県内の特別支援学校や特別支援学級などで学ぶ子どもたちが、毎月二回程度、フライングディスクや陸上、ボウリング、スキーなどに汗を流しています。

現在、この「スペシャルオリンピックス日本・岐阜」の代表を務めている関係で、昨年もいくつかの会場を回りました。冬季のスキーは、毎年、ひるがのスキー場の全面的なご理解を得てやっているのですが、県内各地から参加する会員（「アスリート」と呼んでいます）とその家族、そして、特別支援学校や特別支援学級の現役の先生方やＯＢの方々を中心とする指導者陣でにぎわっています。最初は、怖くて悲鳴を上げているアスリートも、夕方になるころには、ゆっくりと一人で滑走してくるのですから驚きです。見ているお母さんたちも「さすが先生方の指導はすばらしい！」「とても親ではできないかもしれない…」「来てよかった！」「来年も必ず連れてきたい！」と、上達するわが子の姿を見ながら、目を細めています。

心を解放させ、楽しくスポーツすることができる喜びは、障がいの有無とは関係なく、だれでも同じことと思います。今回の東京オリンピック・パラリンピックの開催及び成功は大切かもしれませんが、それとともに、スポーツにおける「多様性の尊重」を考えるいい機会であると捉えてみたいと思っています。

保健室ノート

あたたかい心で自分と仲間を認め合う笠中生

多治見市立笠原中学校
養護助教諭
楠瀬 詩織

笠原中学校の生徒は、中学校で他の小学校からの進学がないため、ほぼ同じメンバーで保育園・幼稚園から中学校までの十二年間の学校生活を一緒に過ごします。お互いのことをよく知っている仲間同士だからこそ大切にしたい思いがあります。「はあとふる」が私たちの合言葉です。「は」は励まし合い自分も伸びる、「あ」は相手を思いやった言動、「と」は友達と認め合う、「ふ」は不安な時は相談する、「る」はルールを守る、これらの意味が込められています。私は養護教諭として、「あ」「と」の気持ちを特に大切にして欲しいと願っています。

本校の生徒は、互いを尊重し認め合えるあたたかい心をもっているなぁと実感するときが何度かありました。特に毎年一年生で行っている、「LGBT-Q～性の多様性～」（同性愛等）について授業を行ったときです。この授業では、色々な性の種類・思考があっていいんだよ、性は個性だよ、とセクシュアルマイノリティ（性的少数派）について知ってもらうことや、それは決して変なことではないと分かってもらうために行っています。今日の日本では約十人に一人がセクシュアルマイノリティであることが分かっています。もしかしたらもう既に、自分の本当の性について分かっている子や、悩んでいる子がいるかもしれません。また、これからの人生で自分の性に疑問をもつ子、セクシュアルマイノリティの人に出会う子がいるかもしれません。自分がそうであった時、悩まないで欲しい、堂々として欲しい、身近な人がそうであった時、認めてあげて欲しい、受け入れてあげて欲しい、そう願っています。

私がこの授業を行うとき、気をつけている事があります。それは、性の多様性についてもっと身近に感じてもらうことです。自分の事じゃない、自分の周りではそんなことはないなどと、どこか遠くで起きていることという意識ではなく、自分にも当てはまるかもしれない、友達が悩んでいるかもしれない、という考えをもって欲しいのです。しかし、尊重する心がなければ、クラス内で心ない言葉が飛び交ってしまう可能性もあります。身近で誰にでもあり得ること、相手を認める心も忘れないで欲しい、そういった雰囲気づくりをしています。

しかし、そんな心配はいらなかったかのように、生徒たちは素直に優しい気持ちで、性の多様性について理解し、考え、受け入れてくれました。授業後の生徒の感想を紹介します。

・セクシュアルマイノリティについては知ってはいたけど、十人に一人くらいだとは思わなかった。自分がそうであっても、友達がそうであってもおかしくないと思った。

・自分は同性愛とかそういうことに対して正直いいイメージがなかった。でもこの授業を受けて、「性は個性」という言葉を聞いて、これから友達や家族がそうだと打ちあけてくれた時、ちゃんと認めて、今までと変わらず接していきたいと思った。

セクシュアルマイノリティについて生徒のほとんどが肯定的に受け入れてくれました。思春期で多感な中学生が、こんなにも優しい心をもっていてくれていることが、養護教諭として本当に嬉しかったです。

ご家庭で性について話す機会は少ないかもしれません。親子という関係が照れや恥ずかしさを生んでいるかもしれません。しかし、お子さんと一度、性についてお話してみてください。もしかしたら不安に思っていることがあるかもしれません。学校・家庭・地域があたたかい心をもって、子ども達を見守っていきましょう。

心に火をつける先生

瑞穂市立本田小学校
校長　松野 正範

「私の先生」という原稿のお題をいただいた。お世話になった先生は、どの先生もそれぞれ、個性的であり、素敵な先生であったことを思い出す。たわいもない会話は思い出しても、人生の転機になったとか、大きな影響を受けたと言えるような先生は思い当たらないような気がする。しかし、これから紹介する二人の先生は、学びのきっかけを与えてもらったという意味では、影響を受けていると言えるかも知れない。

T先生は、中学三年生の時の数学の教科担任である。特に、数学が好きだったわけでもなかったが、数学を勉強しようという気持ちになれたような気がする。

T先生は、授業のはじめに、問題を出される。問題は、学習している単元とは、直接関連もなかったように思うが、私には、簡単に解くことができるものではなかった。T先生は、いつもこれを解けた生徒には、かつ丼をおごると言われた。結局、かつ丼をおごってもらったという話は、友達から聞いたことはなかった。決してかつ丼につられたわけではないが、先生の挑発的な出題が私たちをやる気にさせた。私は、あらゆる方法を駆使して問題を解決することを学んだように思う。例えば、図形の問題であれば、法則を使って解く方法、方程式で解く方法、実際に測る方法、そして、問題を解くには、仮説を立てることも必要であった。それまでの数学と言えば、答えは、一つでそれが合っているかどうかが最大の焦点であり、過程はそれほど重視していなかったように思う。しかし、かつ丼につられて、問題を解く過程を楽しむことを覚えることができた。

M先生は、高校一年の生物の先生である。M先生の授業は、いつも雑談から始まる。内容は、覚えていないが、みんなで先生の話に突っ込みを入れて話を長引かせると、授業の終わりのチャイムが鳴ったこともあった。印象に残っているのは、夏休みの宿題である。植物のリストが示され、その中から任意の百種類を選んで標本を提出するというものであった。おかげで夏休みは、自転車で方々を汗だくになりながら植物を探し回った。アスナロ、ヒノキは、葉の形が似ていること、葉の裏は大きく違うこと、イノモトソウ、ノキシノブは、ワラビなどと同じシダ植物であるということなど、多くのことを学ぶことができた。自分で植物の特徴を調べ、足で稼いだ経験は、大変貴重な財産となった。そのときの経験は、後に理科の教師として学校に赴任し、岐阜県博物館のO先生や当時、各務原少年自然の家にみえたT先生と河川敷を散策し、植物について教えていただいたときの、予備知識としてずいぶんと役に立った。

今、改めて振り返ってみると、数学のT先生、生物のM先生から教わったのは、知識というよりも学び方、追究の方法であったように思う。知識は、すぐに忘れてしまうかもしれないが、苦心して体験の中で学んだことは、そう簡単に忘れるものではない。

> The mediocre teacher tells.
> The good teacher explains.
> The superior teacher demonstrates.
> **The great teacher inspires.**
>
> William Arthur Ward

話そう！語ろう！わが家の約束

自然と出来ている約束事

高山市立宮小学校 PTA会長　架場 貴文

架場家の巻 104

わが家は、小学六年生の娘、私達夫婦、祖父母と大学生の娘の六人家族です。

「わが家の約束」…これといって決めていることはありません。せっかく今回、原稿依頼を頂いたのでこれを良い機会にわが家にも約束事を決めようと思いました。

一、あいさつをする

自ら、進んであいさつができるようにする。

朝の「おはよう」、夜の「おやすみ」はもちろんのこと、感謝の言葉「ありがとう」が自然と出てくるようになってほしいと願います。常に感謝の気持ちを持てる優しい子に育ってほしいと思います。

二、家族の会話をたいせつにする

一日に数分でもよい、家族みんなで会話をする。

学校であったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、何でも良いですが、みんなでの会話を大切にしたいと思います。今年は外出も控えなければいけない状況で、ゲーム等の時間が増えているように思います。その時間の少しでも家族での会話の時間にしていけたらと思います。

気がつけば約束事

岐阜市立精華中学校 PTA　松田 征児

松田家の巻 105

「車に気をつけてね」

子どもを送り出す時必ず添える一言。

取立てて決めた事ではないが、例外なく毎日ずっと頑なに言い続けている。

言い忘れた時は、遅刻を賭してでもこの一言の為に家に戻る。

眠る子どもの耳元で「車は怖いよ…」などと呪文のように繰り返し囁き潜在意識に訴えかけてみたりもした。

古来からの言霊信仰を重んじてもいないし、この一言と引き換えに子どもの安全が得られる訳でもない。

それでも子どもの安全を願う者として言わずにはいられないのだ。

ある日の午後、

「気をつけて帰ってね～」

窓外から友人を送り出す娘の声が聞こえてきた。

お！ちゃんと伝わってるじゃないか。

いいぞ！もっと沢山言いまくれ。

当たり前の親の言葉が誰かを思いやる言葉へ。

やっぱり言霊ってあるかもね。

それではみなさん今日も車に気をつけて。

先生！ありがとう！

～保護者から先生へ贈る感謝の四〇〇字メッセージ～

百年に一度の厄災ともいわれる、猛威を振るっている新型コロナウイルスが日本で最初に確認されたのが昨年の一月、それから我々を取り巻く環境が激変してしまいました。その被害を一番受けているのが子ども達と思います。三月からの休校措置、六月から再開した後も慣れない学校生活が今も続いています。

また、先生方のお仕事も激変し、ただでさえ忙しい通常業務に校内の消毒や生徒の健康管理など以前とは比べものにならないほどの激務になっていると思います。

そんな中、私たちの子どもの為になるべく以前に近い授業や行事を考えていただくため、毎日遅くまでがんばってくださっている先生方へ心からの「先生！ありがとう!!」を言いたいと思います。

今、私たちの子どもが毎日元気に学校に行けるのは、先生方の大きな努力と献身的な愛情によるものと思います。私達保護者はそのことを一人ひとりが考え、先生方が守ってくださっている毎日の日常の大切さを忘れないようにし、子ども達にも伝えていきたいと思います。

（伊藤 洋雄・八百津町立和知小学校ＰＴＡ会長）

information

■作品を募集しています。

イラスト・なぞなぞ・逆さ言葉などの作品を募集しています。イラスト・絵手紙はハガキの裏面に描いてお送りください。ペンネームを使う場合にも、郵便番号、住所、学年と氏名を表面に記載してください。なぞなぞ・逆さ言葉は「親子ではてな」の回答とともにお送りください。

宛先はいずれも　〒500−8816 岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内「岐阜県PTA連合会・作品係」まで

採用の方にはお礼をさしあげます。

■本誌の購読について

本誌は年間5回発行（7・9・11・1・3月）されます。年度初め（4～5月）と7月の2回、各学校PTAを通じて購読募集を行います（1冊200円、5冊1,000円）が、年度途中でもお求めいただけます。学校または県PTA事務局へお問い合わせください。

■7月号のお知らせ（予告）

特集=「親子でサイエンス」／表紙=濃南中／学校のたからもの=方県小・堀津小・墨俣小・高鷲中／わが家の宝物=北方西小／リレーエッセイ／みんなで家庭教育／みんな、いっしょに／保健室ノート=加茂野小／私の先生=苗木中／子育て半生記=高山東小／楽しい読み聞かせ=常磐小／親の背中=池田小・瑞浪南中／1冊の本=蘇原第一小・伊自良中／わが家の約束=広幡小・昭和中／子の思い=市橋小・白川小・恵那東中／親の願い=中原小・鵜沼中／教育の窓=川並小・多治見中／先生!ありがとう!=中小／お試しクッキング／ふるさとの伝承=茜部小／きらり!キッズ!=大垣北小／夢中!熱中!我らが部活=津保川中／私たちのPTA=正木小

子育て半生記

地域で誇れるものや　行事はありますか？

岐阜市立長森南中学校 PTA会長　西田 和久

みなさんの住んでいる地域は、どんなところですか？

「家のまわりに川と山がある」
「四季があり住みやすい」
「自然が豊でのんびりしている」
「夏が暑い、冬が寒い」
「蝶々、かぶと・くわがた虫、とんぼが見つかる」
「高速道路や線路が近くにある」
「歴史にでてくる町や建物、街道がある」
「昔からの行事や、祭りがある」

私が住んでいる長森南地区も、中山道沿いにある都市部ではない岐阜市の地域です。今も健在な両親とともに、くらしているふるさとの町です。

ずっと住んでいたわけでもありません。高校を卒業して親元を離れ、東京の会社に就職し、ようやく四十歳近くで、地元から通える愛知県に転勤でき戻ってきました。

戻ってきても、周りに同級生も少なく、ただ住んでいるだけでした。子どもが小学校に入ったきっかけで、地域に誇れるものに参加出来るようになり、地域が楽しめるようになりました。きっかけとなった子どもには感謝です。

①夜の学校探検

小学校の「夏の友」に「長森南小学校の夜の学校探検」が出ているので少しは有名でしょうか。

準備している二〇〇〇年に作られた地域活動の「長森南おやじの会」に参加し、小学校さんとPTA、子ども会、体育振興会、交通安全協会、女性の会、中学生ボランティアなどたくさんの協力で開催されています。「子どもの喜ぶ顔」が見たくて、その他の活動もしています。

子どもが卒業しても一生涯長森南おやじの会のため退会はないのですが、同窓会などで初めて学友が参加していたのを知ったり、苦労したことなど当時のことを教えてもらったりしています。

②手力雄神社「火祭り」

昔から当たり前に見ていました。一七六〇年代には記録があると言われ、爆竹音が響き、神輿に仕掛けた花火を滝花火の噴き出す火の粉で着け、片手サイズの手筒が有名だと思っています。

昔は高校生は担げなかったため、五十歳を超えてからの町内の火祭り奉賛会へ参加しました。

先輩の皆さんから、大昔に数年中断した理由や復活までの経緯など貴重な話をお伺いできています。また、少しの間でも未来につなげる活動が出来れば良いかなぁと、髪の毛は火の粉で根元から焼け落ちますが年二回（春・夏）は頑張って担いでいます。

※昨年はコロナ禍で二つとも開催されず参加できませんでした。今年の夏には開催・参加できればと祈っています。

小学生や中学生の皆さんは、自分たちで生まれ育つ場所を決めるのは難しく、ほとんどが生活を共にする家族が選んだ場所ですべてが当たり前に思い暮らしていると思います。

私も普段は当たり前に思えていたものが、大人になり、あんなものやこんなことがあったと、地域を離れて見えてきましたし、地域に愛着がもてました。

保護者の皆さんは、代々住んでいる方以外は仕事に都合が良い場所に住まわれていると思います。子どもが小学校に入り、スポーツ少年団などで同級生のお父さんたちと知り合い親交を深めたり、お祭りに参加することで地域の愛着が沸き、住みよい地域に思えてくるのではと考えています。

地域に誇れるものや行事はありますか？

コロナ禍のなか大変だと思いますが、生活や趣味とともに、出来ることからで良いので、地域も楽しみましょう。

Illustration&Quiz
イラスト&クイズ

PN.プーさん（下呂市）

PN.りこ（高山市）

question 1

出題・小藤 杏友（美濃加茂市）
〈答えは41ページ〉

「タチツミト」って何だ？

楽しい読み聞かせ 12

読み手も一緒に楽しむ読み聞かせ活動

海津市立下多度小学校ＰＴＡ

本校では、子育て委員会の活動として、「読書好きな子どもを育てる」、「情操教育の一助とする」ことをねらいとし、「読み聞かせの会」、「読み聞かせ研修会（ガイダンス）」を計画し行っています。

今年はコロナ感染予防の観点から、やむなく一学期は読み聞かせ活動を休止していましたが、九月から再開しました。

一か月に一回、八時十五分から三十分の朝活動の時間を「絵本の読み聞かせの時間」にしています。

一年生から六年生全校の児童を対象とし、各教室に読み手一、二名が行って、自分で選んだ絵本を読みます。読み手は、各学年の学級委員さんや、地域の方々、読み聞かせボランティアグループ〝ほうれんそう〟の皆さんです。また、高学年の児童から立候補を募り、下級生の前で読んでもらうこともしています。

【読み聞かせガイダンスで勉強会】

毎年五月に学級委員対象に〝ほうれんそう〟さんから、ブックトークの仕方や子どもが惹きつけられる話題の絵本の紹介、読み方だけでなく読む前の準備について説明していただきます。「紙の表紙は邪魔になるから外しておく」、「新品の本は紙自体が固いのでめくりやすくしておく」「絵本を持つ手で、絵が見えなくならないように気を付ける」等、読み聞かせにおいて役立つコツを教えていただきます。なにより、読み手自身が絵本を楽しむことがポイントだそうです。

このガイダンスに参加することによって、今まで読み聞かせをしたことがない人でも、自分が読み聞かせをしている姿が想像できるようになります。

【読み聞かせの本の選び方】

低学年は、大きく反応をしてくれるので、しかけを施した、おもしろく笑いのとれる本、高学年は、リアクションは求めず、読み終わった後に少し何か考えられるような本が多く選ばれています。日頃から言葉遣いが気になっていた親さんが、響いてくれますようにと願いをかけて、〝ことば〟についての本を選ばれたときもありました。

それでも本選びは、やはり悩まれる方が多いようです。そんなときには、たくさんの引き出しを持ってみえる〝ほうれんそう〟さんにオススメしていただいたり、各クラスの特徴を熟知してみえる図書室の先生に相談したりする方もみえます。

【読み聞かせの練習方法】

読み聞かせに立候補してくれたある高学年の児童は、家で妹に読み聞かせをして練習しています。場面によって声色を変えたり、強弱や速度、間を考えて読んだり、特に声の大きさに気を付けています。特に今はマスクをしているので、大きな声ではっきり読むように心がけているそうです。事前に図書室で練習する姿もみられます。

大人も、子どもの前で読んでみたり、壁に向かって練習をしています。

【読み手も楽しむ読み聞かせ】

読み聞かせの日の朝、五分前から一人の児童が「読み聞かせの時間だから、みんな座って！」と声かけをする姿がありました。その声かけに対してサッと集まる子どもたち。一方、すぅーっと緊張したように深呼吸する読み手の姿。

読み聞かせの時間が始まり、「選びきれなかったんだけど、どっちの本がいい？」と読み手の方。「うーん、こっち！」と児童たち。始まると真剣に聞く傍らたまに笑いが起こります。

そのうち読み手の方の緊張がとけたのか笑顔になり、とても楽しそうに読まれていました。終わった後も、「緊張したけど、楽しかったです！とっても良い経験になりました！」と言われました。

これは、六年生の一場面ですが、私には、このひとときの中で、読み手と聞き手がコミュニケーションをとっているように見えました。たった十五分が、素敵な十五分間だったように感じます。学級委員の方々には、読み終えたのち、アンケートを書いていただいています。「短い時間ですが、とても良い活動だと思います。これからも続けてほしいです。」「自分自身が、久しぶりに図書館へ行き、小さい頃好きだった本にもう一度出合えました。」といった、読み手も一緒に楽しめる時間になっています。

本校では、親子で本を読む機会を作る〝親子読書週間〟も行っています。これからも読み聞かせや親子読書を通して、本の世界に触れる機会を作り、読書が好きな、心が豊かな子どもを育てていきたいと思っています。

6年児童による読み聞かせ

親子読書の掲示

保護者による読み聞かせ

読み聞かせガイダンス

親の背中 ⑦

親の背中

郡上市立八幡小学校
ＰＴＡ会長　和田 邦弘

ＰＴＡ本部会の話し合いで、「親の背中」を代表で書くことになりました。でも、文章を書くこと、人前で話すことが苦手な私です。自分は親として子どもに語れるほどの大人なのか…。小学生の頃の自分はどうだったのかを考えると、今の子どもたちにはなかなか言えません。

「親の背中」…私が小学生のころ、父親が家にいることが少なくて、親に褒められたことがありませんでした。もちろん叱られること、怒られることは何度もありました。母親は内職をしていて、「宿題をやりなさい！」、問題が分からないと「字が分からんのなら辞書で調べなさい！」など、叱られてばかりの毎日でした。ですから、「勉強なんて嫌い！つまらん！」そんな気持ちが日に日に増してきました。

ある日、学校でちょっとした悪さをしてしまい、「やばい…」と思ったものの、周りの友達からは「すごい！」「よくできるね！」と意外な反応が返ってきました。褒められることのなかった私は少しうれしくなり、楽しくなってしまいました。変な勘違いで、周りに褒められているとまで思うようになり、日々いたずらの度合いが増していき、歯止めが利かなくなってしまいました。小学生とはいえ、いろいろな人に迷惑をかけることもたびたびありました。次第に、友達とうまく遊べなくなり、友達と呼べる子もなく、他人の言うことを理解しなくなりました。

当時の私の態度は、寂しい気持ちの裏返しだったのかもしれません。「親や友達に謝りたいけど謝れない…。」というような心の弱さがあったのかもしれません。悪さばかりに挑戦してきた少年時代、失敗を繰り返し、やる前からあきらめることの多かった学生時代でした。

今、私には子どもが四人います。「子どもは親の言っていることは聞かないけれど、親の真似はする。」という話を聞きました。自分の子どもには、親として、同じような失敗をしないでほしいと願います。

そこで、子どもたちにかっこいい父親を見せたくて最初に挑戦したのは「通信制高校の卒業」でした。大人になってから通信の高校に行き、3年で無事に卒業することができました。子どもたちから「おめでとう！」と言ってもらえた時は、とてもうれしかったです。その高校卒業をきっかけに、幼稚園の会長、小学校のＰＴＡ会長と挑戦しています。

親に遊んでもらったことのない私に、やさしく、子どもとの遊び方を背中で見せてくれる妻もいます。昭和の考えの私には、なかなか今の時代が難しいですが、学校の先生方や周りの保護者の方、そして妻に支えられ、助けてもらっています。本当に感謝しています。私の過去のことを言ってくる人もいますが、これからも感謝の気持ちをもって、今の自分を見てもらえるように、「私なりの背中」を子どもたちに見せていこうと思い頑張っています。

話せる人

羽島市立中央中学校
ＰＴＡ会長　入山 麻美

学生時代、私にはあまり友達がいませんでした。でも、学校は大好きでした。なぜなら、好きな部活をやり、先生と話す事が楽しかったからです。休み時間になると、職員室や保健室、図書室等に行き、知らない先生とも話をしました。ある日ふと「何故、同年代とは話しにくいのだろう？」と思い考えてみると、原因は生活環境にありました。私の実家は自営業で食料品のお店をしています。学校から帰ると、親やお客さんのいるお店に直行、長い時間その日にあった事をひたすら話していたのを覚えています。同年代よりも年配の方と話す時間が長かったせいか、クラスに中々なじめませんでした。しかし、それでも学校が好きだったのは、それを解った上で話を聞いてくれた先生方のおかげなのだと思います。感謝しています。

今の時代、色々な悩みを抱え、学校や教室に通えない子どもがたくさんいると思います。ぜひ、子どもたちには、自分の話を聞き、理解してくれる人生の先輩である親・先生・近所の方を見付け、気軽に話しかけてほしいと思います。そして、周りにいる大人にも、「今日はどうだった？」などと話しかけてほしいです。日常のあいさつからでいいので、自分の子どもだけではなく、他人の子にも目を向けてください。

「ひとの子も　わが子と同じ　愛の手で」という地域の看板を近所でよく見かけます。凄く良い言葉だと思い、心に残っています。その言葉通りの世の中になるといいですね。

今回、「親の背中」というお題で依頼が来た時に、何を伝えたいのかを考え悩みました。胸を張って子どもに何かを教えられる学力はありません。しかし、人に対する心は自信を持って話せるかなと思い、自分の昔話をしました。私は良い人間ではありませんが、周りを助けられる人間にはなりたいです。自分の子どもたちにも、周りに目を向けられる大人に成長してほしいと思います。

すみ鬼にげた

著者：岩城 範枝 作　松村 公嗣 絵
出版社：福音館書店

可児市立南帷子小学校 PTA副会長
櫻井 佳代子

奈良唐招提寺の金堂の屋根の下に、小さなすみ鬼が四つ、屋根を支えるように正座をしてはめこまれているのをご存知ですか？

四隅の鬼のうち三体は必死の形相ですが、一体だけ表情が違うという。泣いているのか笑っているのか…何か隠された秘密がありそうで、そこに引き込まれました。

三百年前、宮大工の見習いヤスは唐招提寺のお堂の軒下で泣いているすみ鬼を見つけた。そのすみ鬼は、中国から日本の鬼と一勝負したくてこっそりと船に乗り込んだが、鑑真に見つかりすみ鬼にされ、疫病や魔物から守り続けてきた。他の三体はぴくりとも動かず声もでない。しかしこの一体は、今でも日本の鬼と勝負をしたいと言う。ヤスは鬼が哀れに思い、釘をはずし自由にした。

すみ鬼と日本の妖怪たちとの一戦が始まった。ヤスは妖怪たちに食べられそうになるが、すみ鬼が助けてくれた。

鬼はヤスが親方に怒られないようにお寺に戻ったが、そこで捕まってしまう。きっと捕まる覚悟をしていたのでしょう。

鬼はまたすみ鬼として戻された。でも、もう泣くことはなかった。なんと潔いのでしょう。強くて優しい鬼。これほどの願いは私にあるのだろうか…「執念」と聞くと悪いイメージがありますが、執念も執着も、使い方次第だと思います。何かを成し遂げる人、目標を達成していく人は、執念、執着を強く持てる人です。予想外の出来事や問題が起きた時に「何が何でも達成する。成功させる。」この強い気持ちがなければ諦めてしまうでしょう。人の想いとは時には不思議な力を発揮します。

しかし、諦めずに頑張っても成果が出ないときもあります。悔いが無ければ人はプロセスを大事にします。自分を認められる心の柔軟さは愛に溢れ、自分を苦しめる事はありません。目標への強い思いが結果に繋がり、いつの間にか自分のため、誰かのため、世の中のためにと広がっていくのだなと思います。

鬼は九百年、誇りを失わずお寺を守り続けました。ヤスにも優しく悪さはしませんでした。鑑真はどうしてすみ鬼にしたのかな？と思ってしまいます。私達が知っている鬼は怖い存在で、いつも悪者です。屋根を支えているすみ鬼。なんだか可哀想に思えてきます。

国を統一しようとした大和朝廷によって、従わない者は悪者（オニ）とされ討伐されました。オニとはもともとは私達と同じ人間だったのです。まるで鬼滅の刃みたいですね。

平成から令和に元号が移り変わった今、鬼ブームがきています。本当の鬼を知る時かも知れませんね。

鑑真は、本当の鬼を知っていたのでしょうか。一夜限りの勝負に、鬼として存分に生きた魂はようやく鎮まったのでしょうか。それも粋だが、毎夜脱走して妖怪達と勝負して、笑っていて欲しいと切に願う。

いつか唐招提寺を訪れた時、すみ鬼を見つけたら『よくやったね』と褒めてあげたい。

ステップ

著者：重松　清
出版社：中央公論新社

恵那市立上矢作中学校PTA
安藤 美和

この本を選んだ理由は、好きな俳優がこの原作の映画の主演だったからです。

話の内容を簡単に説明すると、妻を亡くしたシングルファザーが悪戦苦闘しながら一人娘を育てていくというものです。

あの俳優が父親役か、どんな父親役になるのだろう。と言った興味からこの本を読もうと思いました。

主人公の健一は妻が突然の病で亡くなった事により、シングルファザーになってしまいます。娘は一歳半、お母さんがいなくなってしまった事も分からない年頃、どうやって育てていこうか悩んだ末、両親や、義父母の力を借りず一人で育てていこうと決めます。

最初に自分が考えた事は、自分が同じ境遇になったら、まず自分の親を頼ってしまうだろうと思いました。

健一が娘の美紀を育てていく中で、様々な人たちと出会うのですが、健一の気持ちや美紀を取り巻く人達の心の描写がとても良く描かれていて、「自分でもそう思うかも。」とか、自分の事に置き換えて考えられる場面が多々ありました。

主に健一は妻の実家の両親や妻の兄夫婦と過ごす時間が多かったので、妻の両親を思う気持ちや付き合っていく上での葛藤は自分の事のように分かりました。

美紀が小学生になり母の日に渡すお母さんの似顔絵を描くことになった時、他の生徒はお母さんがいるから写真はいらないけれど、美紀だけはお母さんの顔を覚えていないし、いないからと言う理由で「写真を持たせて下さい。」と先生に言われた健一の気持ち。自分が言われたわけではないけれど、読んでいてとても悔しくなりました。

お父さん、おじいさん、おばあさんの愛情を受け素直に育っている美紀は、家にあるお母さんの写真を見て、毎日話しかけ、「お母さんはここにいる。」と思っているのに、なぜ先生はたとえ本人ではなくとも、その父親に対して、「お子さんは、お母さんは家にいる。と嘘を言っています。」などと言うのかと腹が立ちました。子どもの心に寄り添って物事を考えられない人なのだと思いました。

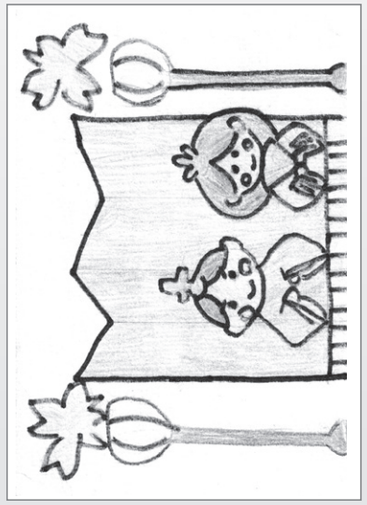
最後、美紀のおじいさんがガンを患い余命が長くないと分かった時も、おじいさんの孫に会いたいけど、痩せて変わり果てた姿を見られたくないだろう。でも会わなかったら後悔するだろう。と健一達が孫に会う機会を作り孫に会えた場面でも、美紀がおじいさんの姿を見てこれからの事を悟り、おじいさんにかけた言葉、おじいさんが美紀にかけた言葉に、人が人を思う優しい気持ちを感じずにはいられませんでした。

「ステップ」と言う言葉の意味は、「血縁関係のない」といった意味らしいですが、この本を読んで思った事は、美紀と健一は親子で血は繋がっていますが、物語に出てくる健一を取り巻く人達は血縁関係がないわけで、血の繋がりはなくてもお互いを思う気持ちがあれば、血の繋がり以上の絆ができるのだなと思いました。

原作も素晴らしかったですが、今度はDVDを借りて映画も見てみようと思いました。

Illustration&Quiz
イラスト&クイズ

PN. あおい（大野郡）



PN. 木村 めぐみ（各務原市）

question❷

出題・赤堀 晴輝（岐阜市）
〈答えは41ページ〉

ふたつのとびらの間にある
野菜ってなーんだ？

子の思い

ぼくの大じな家族

大垣市立西小学校
三年　伊藤 蒼徠

ぼくの家族は、お父さんとお母さんと、妹で、四人ぐらしです。

お父さんは、夏ぐらいになると、ぼくの大好きな「アユ」という魚をいっぱいつってきてくれます。他にも、家族のために、会社で夜おそくまで仕事をしてくれます。テストで百点を取ると、「すごいね。」と言ってくれます。ぼくは、お父さんにほめられるのが大好きです。

お母さんは、いつも、「えいようのバランス」を考えておいしいごはんを作ってくれます。お母さんは、人を助けるお仕事をしています。ぼくがねつを出したときも、一生けん命かん病してくれて、すごいなあと思います。

妹は、一年生なのに、ぼくぐらいしっかりしてお手伝いをしてくれます。ぼくの勉強が終わらないときに、妹が、「がんばって。」と言うので、「がんばろう。」という気持ちになります。

このように、ぼくの家族は、やさしくて、楽しい毎日なので、ぼくにとって、お父さん、お母さん、妹は、世界で一番大じで、大好きです。

今日も、元気に行ってきてね。

中津川市立付知南小学校
四年　牧野 晴愛

わたしのお母さんは、朝からとてもいそがしそうです。洗たく物をたたんだり、お化しょうしたりしています。でも、わたしが学校に行く時間になると、

「今日も、元気に行ってきてね。」

と、毎日かかさずわたしに声をかけてくれます。どんなにいそがしくても、寒いときもかかさず言ってくれるのです。

わたしは、「楽しく行ってこよう。」「苦手なべん強もがんばるぞ。」と、お母さんの言葉のおかげで、やる気になって学校に行けています。お母さんから、大好きな気持ちが伝わって、うれしくなります。

わたしは学校に行くから、お母さんを見送れないけど、土日に仕事に行くときは、

「お仕事、元気に行ってきてね。」

と、大好きな気持ちをこめて言いたいです。

お母さん、いつもありがとう。

仲間

各務原市立緑陽中学校
三年　平野 凛太郎

みなさんは「仲間」と聞くとどのようなイメージをもつでしょうか。友達の類義語。一緒に遊んでくれる人…。そんなふうに思う人もいると思います。しかし私は、この「仲間」という言葉の意味を知り、周りに仲間がいることを感じるだけで世界が大きく変わると思います。

私がこの「仲間」という言葉の意味を考えるようになったのには、あるきっかけがありました。

私は昨年、とても仲の良い学級に所属していました。担任を初めて務める先生と、それを支える生徒たちで、男女構わず、全員が笑い合える学級でした。私はすでにそのとき、「この学級は今までの学級とは違い、これが『友達』ではなく、『仲間』なのではないか」と思っていました。しかし、「では何が違うのか。」と考えてみると答えが見つかりませんでした。

そんなとき、ある転機が訪れました。頭蓋咽頭腫という病気が見つかったのです。その時点で手術をすることは確定だったので、検査や手術のために休むことを学級の仲間には何も告げず、先生にだけ話をして、学校を休んでいました。そして、手術終了後に学校の先生から学級の仲間へ、病気のことを伝えてもらいました。とても難しい手術で、10時間にも及ぶものだったので、心配しないはずがありません。私だったら、何で教えてくれなかったのかと怒ると思います。正直、手術が終わって、入院している間も後悔していました。

退院直前のある日、担任の先生はある動画を持って来てくれました。それは、学級の仲間からのメッセージでした。それを見て私は泣きそうになりました。そして私は気づきました。仲間とは、「困ったときに助けてくれる人」なのだと。

退院後、初めて学校に行ったとき、車から降りると校舎から、「りんたろー！おはようー!!」という声が聞こえてきました。この仲間とじゃなかったら、こんな困難は絶対に乗り越えられなかったと心から思いました。それからは毎日が本当に楽しくて、世界が大きく変わりました。

二月二十七日。一斉休校が発表されました。それを知らされたのは、六時間目だったため、急遽、学級解散式となり、短い時間での仲間との別れとなりました。全員が、別れを悲しみ、多くの人が涙を流していました。そのとき、「自分にとっての仲間」ではなく、「互いに仲間の関係」であったことに気づけました。

今、私は新しい学級で過ごしています。去年に戻りたいと思うときもたくさんあります。しかし、仲間は自然にできるものではなく築き上げていくものです。これから卒業まで、自分が相手にとっての「仲間」となれるよう努力していきたいです。

親の願い

コロナ禍の恩恵

岐阜市立長森西小学校
母親委員　小川 明子

いつもより数ヶ月遅れて、しかも不安いっぱいの中で始まった今年度。普段何気なくしていた行動も制限され、学校行事や地域のふれ合いがほとんど行えず、何もかもが異例の一年でした。

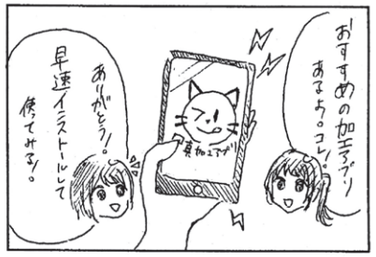
そんなコロナ禍の中でも、恩恵を受けたことがあります。

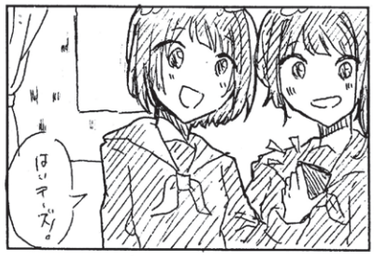
私には三人の子どもがいますが、小六の長男は小三半ばから不登校状態です。全く登校せず家に引きこもる時期、数時間だけ登校する時期、様々な時期を経て、今は週三日ほど放課後登校をしています。

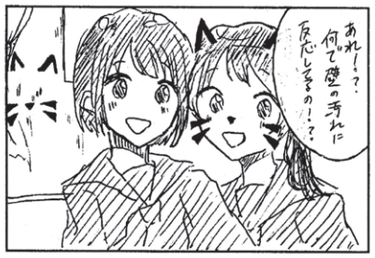
三月からの全国一斉休校により、生活面や学習面でも不安はありましたが、長男に限っては「学校に行かなければならない状態」「自分だけが学校に行けない状態」がなくなったので、みるみる元気になっていきました。表現すること・書くことが苦手な子ですが、学校からの課題をパソコン入力で向き合うという、みんなと同じ方法ではない学習方法に出会いました。課題の量が多かったので親としても負担はありましたが、一緒に学び直す時間も楽しく、

県立大垣桜高校 まんが研究部

加工アプリ







逆さ言葉

おもちまだまだまちもお

（お餅まだまだ待ちモオ）

出題・富田 莉世（揖斐郡）

子の思い 親の願い 教育の窓

学びの方法は無限大であると改めて感じた休校期間でした。

また、岐阜市の小中学生は、十月末より一人一台のタブレットを配布していただきました。担任の先生も積極的に活用してくださり、修学旅行も時間を決めてリモートで参加、普段の授業も一週間に数回繋いでくださっています。タブレットの操作は基本担任の先生ですが、今では同じ班の子たちが操作してくれる姿も。顔出しが恥ずかしいわが子が押す〝挙手マーク〟を見て、「あ！返事あったあった！」と反応してくれます。今の時代に沿った学びを、子どもたちはどんどん吸収しています。今まで学校の様子が全く分からなかった息子にとって、友達が授業を受ける様子を見られるだけで、学校に対しての壁が低くなったことは間違いありません。タブレットの配布を整備してくださった岐阜市、担任の先生をはじめとする学校の先生方、変わらず遊んでくれる友達、今まで出会った多くの方々に感謝が尽きません。

私は親として、自分が産んだ子・自分の子どもであるが故に、子どものことをわかっている気になっていました。子どもといえども別人格。不登校という表現をしてくれた息子のおかげで、長男だけではなく子ども達のことを改めて理解できるようになってきた気がしています。

未だに先が見通せず不安な状態が続いていますが、この経験をも糧として成長していく子どもを信頼して見守り、共に困難を乗り越えていけたらと思います。

地域の子どもたち

輪之内町立輪之内中学校
PTA会長　伊藤 国男

今、私の地域の子どもたちを見ていて感じることは、新型コロナウイルス感染症対策で勉強だけでなく、自由に遊べないという不自由さがあるということです。私ながらに色々と考えましたが、世界でどうにもならない実態です。

私には子どもが三人います。高校二年生、中学三年生、小学五年生です。子どもたちも勉強を頑張っていることが見ていても分かります。教育側、家庭側でも様々な対策を考えていると思います。特に教育をする側である学校は本当に大変だと思いますし、コロナ対策で勉強の遅れを取り戻す子どもたちも必死だと思います。

これからは、世界、地域のみなさん、もちろん家庭でもコロナウイルスと戦う世の中になると思います。子どもたちは多くの我慢をしていて、意見を言えず、遊ぶ場所も限られて大変です。私は、地域の子どもたちである保育園児等、小学生、中学生、高校生、大学生を見ていて、大人と一緒だと感じました。自転車で通学、徒歩での通学をよく見ます。子どもたちの顔が一生懸命の顔、前に進んでいる顔、様々な顔をして毎日を過ごしているように見えます。

私は、子どもたちと会った時は笑顔で挨拶することを心がけています。そうすると子どもたちは必ず笑顔で挨拶をしてくれます。私はすごく心が安まります。人は笑顔が一番だと私ながら思い、辛い時でも笑顔になるように心がけています。そのためには一人ではなく、家庭、友達等、まわりの人々の温かさやつながりが必要です。今は会って話すことが難しいと思いますが、十分にコロナ対策をしながら会話をしてもらいたいです。

私の家族は、過去に子どもが悩んだ時期がありました。要因は様々あったと思いますが、本人の話をしっかりと聞き、家族みんなで話をして、いろんなことを考えて守ってきました。その甲斐もあり、今は元気に過ごしています。みなさんも子どもと会話をしていると思いますが、もっともっと子どもと会話をし、サインを受け止めてほしいと思います。

最後になりますが、私の地域のみなさんはとてもよく協力していただいており、本当に助けていただいています。私は今、中学校のPTA会長と郡PTA会長を兼任させていただいていますが、私はPTA役員をやらせてもらい本当に良かったと思っています。これからも大変な時期が続くと思いますが、地域のみなさんと協力しながら乗り越えていきたいと思います。そして、もっともっと地域の子どもたちを大人たちが守っていきたいと思います。

教育の窓

学校、家庭、地域の連帯で子育てを

関市立金竜小学校
教諭　野村 修平

先日、私の担当する三年生は社会見学を実施することができました。行先は「関市洞戸地区のキウイ農家」と「フェザーミュージアム」です。今年は、コロナウイルスの感染予防の観点から活動が実施できるか不安でしたが、マスクを着用したり、活動を一部省略したりするなどして、楽しみにしていた社会見学を行うことができました。

この社会見学は、学校、地域、保護者の連携のもと実施されています。まず地域です。キウイ生産農家である神山さんに、キウイの圃場を開放していただき、もぎたてのキウイの味を体験させていただきました。キウイは選果場でエチレンガスをかけて初めて甘みが増し、知っているキウイの味になるわけですが、ガスかけをする前と後のキウイの味の変化を知ることができました。

選果場では、農協職員の永田さんにスケッチブックを使った手作りのクイズで、説明していただきました。楽しいお話を子どもたちは目を輝かせて聞いていました。フェザーミュージアムからは、館内学習用DVDを事前に学校に送付していただき、密を避ける配慮をしていただきました。

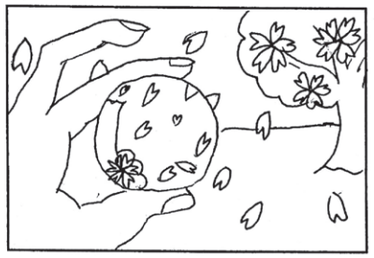
お昼のお弁当の時間には、「早起きして家族の方が作ってくれたよ。」「一緒にお弁当作りをしたよ。」と子どもたちは嬉しそうに話しています。こうして、学校、家庭、地域の連携で有意義な一日となりました。

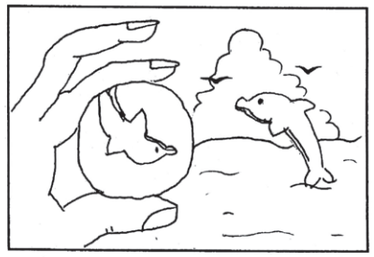
近年、教育現場では「働き方改革」と言われる通り、様々な取組がなされています。現場でも、夜の留守番電話の設置や登校時刻の見直し、部活動のあり方等、改革の風を肌で感じます。これらの改革の本質は、「授業の準備など教師にしかできない活動にエネルギーを集中するための環境整備」に他なりません。そのためにご理解いただいている家庭、地域には大いに感謝しています。

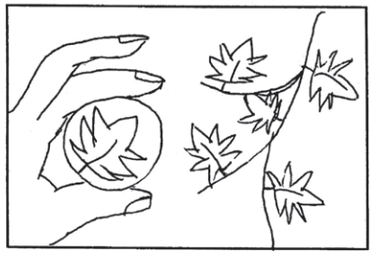
新型コロナウイルスによる社会への影響が日に日に大きくなり、この原稿を書いている時点でも、感染者数が過去最大を更新するなど見通しが持てません。しかし、この厳

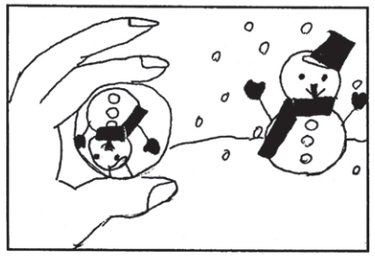
県立大垣桜高校
まんが研究部

ビー玉を覗く









逆さ言葉

みるくとくるみ
（ミルクとクルミ）

出題・堀 希実（羽島郡）

しい状況下でも学校、家庭、地域が連帯し、協力することで必ず教育の成果を上げることができます。手を取りあう大人たちの姿を子どもはよく見ています。そして、力を合わせる方法やその力を覚えます。新型コロナウイルス感染症の流行はピンチのように見えますが、今こそ学校で、家庭で、地域で連帯する姿を見せるチャンスであると考えています。

大きな出会い

本巣市立根尾中学校
教頭　村木 秀昭

教員になって気づけば、すでに三十年が過ぎてしまいました。それぞれの学校で多くの校長先生と出会いました。その中で自分に大きな影響を与えてくれた二人の校長先生のことを記します。

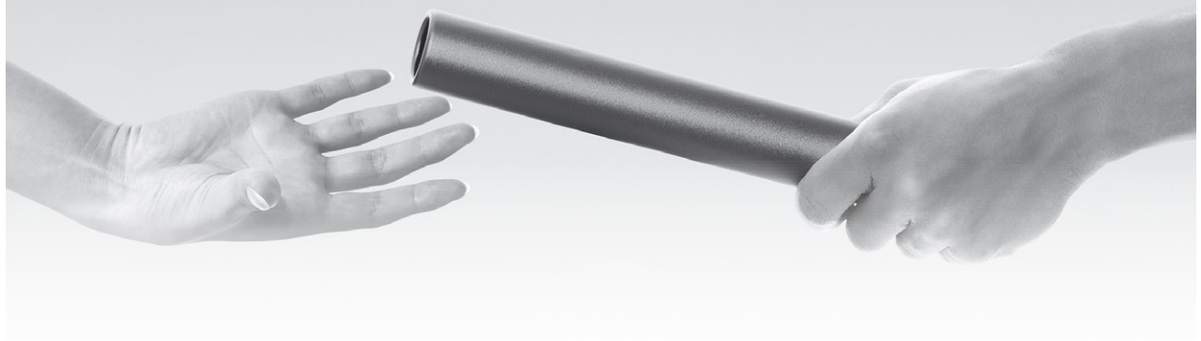
一人目は、私が初めて生徒指導主事を務めたI中学校で出会ったK校長先生。日頃からよく言われたことが「常に子どもに軸足を置く」と「授業こそ生徒指導」でした。当時のI中学校は、いわゆる荒れた状態で、毎日のように授業から飛び出す生徒が数多くいて、その対応に職員は振り回されていました。場当たり的な対応だけでは、解決に程遠いと感じていました。授業が成立するかどうかの瀬戸際の状態でした。その時校長先生が「一種類の画一的なプリントを持って教室に行くか、三種類（個に応じた三段階のレベル）のプリントを持って教室に行くか…これが教室を出ていく子を生み出す授業になるか否かの違いじゃないか」と言われました。「教室を飛び出していく生徒を咎める姿勢だけが蔓延る職員気質の中では改善される見通しは見えない。この一時間で彼らに何をさせるのか、何ならできるのか、そのためにどういう準備をすべきか…こうした作戦に脳みそを使って実践するのがプロ集団であり、その気迫が生徒を変えていく。」まさに、「生徒に軸足を置く」「授業で生徒指導」の精神だったと思います。そんな先生の教えを少しでも実践できる自分でありたいと思いながら、教員人生を送っています。

二人目は、教頭になって初めて赴任したG高等学校のI校長先生です。今まで中学校教師の経験しかなかった私にとって、高等学校への赴任は、衝撃的で不安しかありませんでした。システムも何もかもが中学校とは違い、わからないことだらけの毎日でした。そんなG高等学校へ新たに赴任されてきたのがI校長先生でした。大変厳しい方で、校長室に呼ばれ叱られるのが常でした。管理職として生徒や職員にどう向き合っていくのかを伝えたかったのだろうと思いますが、その当時はそんなこともわからず、ただ毎日の辛さにめげそうになっていました。そんなある日、ある部活顧問から遠征費の扱いについての相談がありました。昨年度までと同じ形式で提案文書を作り校長先生の決裁を仰いだところ、まさかの「ダメ」の一言。私は何度も校長先生に掛け合いに出向きましたが、許可が下りず、校長先生と顧問との板挟みになっていました。遠征に出向き頑張ろうとしている部員や顧問のことを考え、他校の状況や、他県の様子を徹底的に調べあげ、再度校長先生に提案をしたところ、「そうね、教頭先生のこういう姿勢を待っていました。」と満面の笑顔で提案を決裁していただくことができました。I校長先生には、本当に何度も叱られました。でも、その裏側には「前例に流されるだけでなく、（生徒のために）こんなこともしてほしい。」という思いがあったんだと気づかされました。今まで叱られ続けたことが溶けてなくなった気がしました。

二人の校長先生には、管理職として、教員として本当に大事なことを教えていただきました。今まで勤めた学校で出会った多くの先生方や生徒たちから得たこと、教えてもらったことは私にとって最大の財産です。残り僅かな教員人生かもしれませんが少しでも恩返しできるよう今後も精進していきたいと思っています。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、
持続可能な社会の実現に取り組みます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGsとは

2015年9月の国連サミットで150を超える加盟国首脳の参加のもと、全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）」のことです。SDGsはすべての国の社会課題を対象とした17のゴールと、その課題ごとに設定された達成基準である169のターゲットから構成されます。このゴールとターゲットによって、包括的で持続可能な社会の構築を目指すものです。

持続可能な地球環境

事業活動における環境負荷低減への取組を進めるとともに、気象災害による被害や損失を軽減するためのサービスの提供を通じて、気候変動の緩和と適応に貢献します。

関連する主なSDGs	主な取組
12 13 14 15	・再生可能エネルギーの普及支援 ・自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング

安心して暮らせる社会

SDGsの理念である「誰一人取り残さない」を実践するべく、年齢や性別等に関わらず、高品質なサービスを、より多くのお客さまに提供します。

関連する主なSDGs	主な取組
1 2 3 4 5 6	・健康づくりの支援 ・先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応

活力のある経済活動

多様な環境変化にともない発現する新たなリスクへの対応策を提案し、サステナブルな経済活動を支えます。

関連する主なSDGs	主な取組
7 8 9 10 11	・次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） ・災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。
※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会

お試しクッキング

ひじきとそぼろの炒め煮

岐阜県学校栄養士会

ひじきは乾物として1年中手に入りますが、3月から5月が旬の海藻です。不足しがちなカルシウムや鉄、食物繊維が豊富で、家庭でも食べてほしい食品のひとつです。

豚ひき肉とにんにく、はちみつを少し入れることで風味が良くなり、ごはんが進む一品です。海藻が苦手な子どもにも食べやすく、給食では人気メニューのひとつとなっています。

汁気がなくなるぎりぎりまで煮ることが、おいしく仕上げるポイントです。また、作り置きができるので、一度にたくさん作っておくと便利です。

作り方

❶ 米ひじきは洗って水につけて戻す。戻ったらざるに上げ、水気を切っておく。
❷ にんじんはせん切りにする。
❸ えだまめはゆでて、さやから出しておく。（冷凍むきえだまめを使用してもよい。ゆでておく。）
❹ みそは、しょうゆ、水でといておく。
❺ 鍋にごま油を入れて熱し、豚ひき肉、おろしにんにく、おろししょうがを入れて炒める。
❻ にんじんを入れて少し炒めてから、砂糖、酒を入れる。
❼ 砂糖がとけたら、はちみつ、❹の調味料を入れて煮含める。
❽ 汁気がなくなるまで煮て、❸のえだまめを入れて仕上げる。

材料

（材料4人分）

米ひじき	大さじ2（約10g）
にんじん	小1/2本（約40g）
えだまめ	80g（正味40g）
豚ひき肉	60g
おろしにんにく	少々（約1g）
おろししょうが	少々（約1g）
ごま油	小さじ1／2
砂糖	小さじ1
酒	小さじ1
はちみつ	小さじ1
みそ	大さじ1
しょうゆ	小さじ1と1／2
水	大さじ1

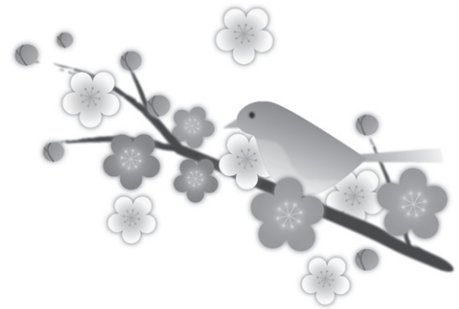
●栄養価（1人あたり）

エネルギー	71kcal
たんぱく質	4.6g
脂質	3.7g
カルシウム	39mg
鉄	0.8mg
亜鉛	0.5mg
ビタミンA	84μgRE
ビタミンB_1	0.14mg
ビタミンB_2	0.06mg
ビタミンC	5mg
食物繊維	2.4g
塩分相当量	0.5g

3月号の 親子ではてな

Q1 「梅に鶯（ウグイス）」と同じ意味になる例えは、次のうちどれでしょう？

ア　紅葉に鹿
イ　水と油
ウ　犬猿の仲



Q2 一日のうち、花粉が一番多く飛んでいるのは、いつでしょうか？

ア　早朝
イ　昼
ウ　夜

応募方法

応募者は、はがきで、3月末までに下記の宛先へお送りください。
（1人1枚・当日消印有効）
※クイズの答えは1問だけでもOKです。

宛先　〒500−8816
岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内
岐阜県PTA事務局
「わが子のあゆみ編集部」

なお、応募はがきには『わが子のあゆみ』への感想・意見やなぞなぞの問題と答え、逆さ言葉などを記入してください。

- ●3月号クイズの答え
- ●郵便番号・住所 学校・学年・氏名 保護者名
- ●『わが子のあゆみ』への感想・意見
- ●「なぞなぞ」の問題と答え
- ●逆さ言葉

1月号クイズ答え

Q1 イ　Q2 ウ

1月号のクイズ当選者

伊藤　涼華	（岐阜市）	土屋　美賀	（関市）
中村　心音	（岐阜市）	鈴木　花歩	（郡上市）
浜野　心優	（岐阜市）	和田　智咲	（郡上市）
木戸　綾乃	（羽島市）	伊佐治琉那	（美濃加茂市）
藤川　颯斗	（各務原市）	小縣　侑奈	（加茂郡）
松原　壮佑	（羽島郡）	伴　香羽	（多治見市）
池田　涼菜	（大垣市）	西尾　大和	（中津川市）
勝　有萌果	（不破郡）	堀　かれん	（高山市）
市村　優成	（関市）		

なぞなぞの答え

①手紙（テがミになっているから）
②トマト（戸・間・戸）

多治見市立南姫小学校　ふるさとの伝承

南姫小学校は、多治見市の北西部に位置し、田畑や丘陵に囲まれた、緑豊かな自然に恵まれた学校です。地域には、姫川・ＪＲ太多線・国道旧２４８号線が東西に通り、それらを見下ろす小高い丘の上に校舎が立っています。校区のふれあいセンターや福祉施設、公民館や自治区事務所は、教育活動の様々な面で援助や協力をしていただけます。そこで、地域の環境に関わり、地域の方々との交流を図る機会を位置づけることで、ふるさと姫への理解を深め、自分たちの地域に愛着をもち、大切にしようとする気持ちを育てたいと考えています。

今年度はコロナ禍で十分な取組や活動ができておりません。昨年度の取組も織り交ぜて紹介します。

一つ目に、三・四年生の「ふるさとの川を知ろう姫川探検」です。探検は、毎年春と秋（今年度は十月に一度）に実施しています。普段よく目にしている姫川ですが、知らないことが沢山あることを再確認できます。活動については、姫川に生息する生物や水質について調査をします。この調査で見つけた生物の種類は、十五種類になりました。また、水質調査では、水温・ＰＨ・ＣＯＤ・透視度を測定し、結果、「少しきれいな水」であることがわかりました。今回の姫川探検では、姫川を「きれいにする。」や「ごみを捨てないようにする。」など、ふるさとを大切に思う気持ちを育む活動になりました。

二つ目は、五年生の、校区にある福祉施設「陶技学園」と毎年行う交流についてです。はじめに、施設を訪問し、障がいについて学ぶとともに、そこで働く人の思いを知り、さらに作業施設を見学させてもらいます。後日、陶技学園の皆さんを招待して、自作のゲームで交流します。訪問で学んだことを元に、障がい者の方に楽しく参加してもらうために、ゲームの内容や説明の仕方を工夫しました。交流を通して、地域に住むいろいろな人に、思いやりの気持ちをもって接することの大切さを学びました。

三つ目は、六年生の総合的な学習の時間に取り組む、「郷土の歴史　日本の歴史」です。校区の大藪地区には、七世紀あたりに作られた、横穴式円墳が存在したことを学び始めとし、地域の講師を招き学習を進めます。講師の方からは、体育館に再現した古城跡の分布図から、戦国時代の東濃地方の様子を教わったり、実際に史跡を訪れて歴史上の人物や業績を教わったりしました。現在では想像もつかない地域の歴史を知ることで、ふるさと姫への理解を深めることができました。

これからも、地域とのつながりを大切にして、「ふるさと姫」に愛着をもち、地域に貢献できる人材づくりに力を注いでいきたいと思います。

▲陶技学園の方と手作りゲームを楽しむ様子

▲陶技学園で働く人が説明をしている様子

◀体育館で城や領主について説明する講師の先生

▲史跡の説明を聞く子ども達と講師の先生

▲透視度を計る器具に水を入れる子ども達

▲校舎から見た、広がる校区

姫川で魚など生き物を▶採集する子ども達

ふるさと南姫　～地域と共に～

きらり！キッズ！

下呂市立東第一小学校

本校は今年で創立百十二年となる伝統ある学校です。これまで体力づくりや縦割り班活動に継続して取り組んできました。

統合により本年度三月で閉校を迎えることとなりますが、これまでに培ってきた力と地域の人達の愛情を心の支えとして、新しく始まる学校生活においても、いっぱいの「自信と笑顔」で過ごしていきます。

体力づくり

運動会

二時間目が終わると、グラウンドに子ども達の元気いっぱいの声が溢れます。毎週火曜日と木曜日は体力づくりの日として、縦割り班での八の字跳びや持久走など一年を通して体力づくりに取り組んでいます。持久走の取組期間中には、業間だけでなく、朝や昼休みを使って意欲的に取り組む児童も見られます。

特に一学期は「竹馬、一輪車、縄跳び」に力を入れています。全校児童がどの運動にも挑戦します。そして、その成果を運動会で毎年披露してきました。

六年間継続して取り組むことで、高さのある竹馬に乗れるようになったり、集団で一輪車の演技ができるようになったりしています。体力の向上はもとより、「めあて→努力→自信づくり」のサイクルを生み出す大切な時間になっています。

「継続は力なり」、東っ子が得た大きな宝物を四月からも大切にしていきます。

運動会の発表を目指して練習に取り組みました。

仲間や高学年にコツを教えてもらえることも今までの取組の財産です。

運動会では全員が素敵な演技を披露できました。

なかよし班活動（縦割り班活動）

なかよし班活動

毎年、一～六年生で編成する縦割り班活動（なかよし班）を行っています。週に一回、業間時の「わくわくタイム」や掃除に取り組んでいます。

「わくわく活動」では、六年生が遊びを計画し、それぞれのグループごとに遊びます。「わくわくタイム」当日には、「今日は〇〇遊びだ！」と喜びの声が多く聞かれます。冬場になると、「八の字跳び」を行い、最高記録を目指します。

掃除の時間には高学年が見本を示し、それを真似て取り組んだり、高学年に負けないようにと真剣に取り組んだりする児童もいます。

いろいろな学年の仲間とかかわることで培った「人を気遣い、思いやる」心を新しい学校生活の中で発揮していきます。

みんなが楽しく遊べ、笑顔が溢れます。

みんなで励まし合って記録を伸ばしていきます。

みんなで力を合わせて、掃除に取り掛かります。

瑞穂市立穂積北中学校

夢中！熱中！我らが部活

サッカー部

「人間性　～みんなから愛される部活を目指して～」僕たちサッカー部は、2年生9名、1年生4名で活動しています。サッカー部では、部活動だけではなく、日々の生活も意識し、あいさつをしっかりしたり、ボランティア活動に参加したりしています。たくさんの人から応援されるように、練習も一生懸命頑張ります。目標は県大会出場です。

野球部

「撃で勝つ」というスローガンのもと、集中力をもち、緊張感があり、意味のある練習ができるように、1・2年生15名で活動しています。秋の県大会で悔しい思いをしたことを忘れず、人間性を磨き、打撃力、守備力、投手力、走塁技術の全てをレベルアップさせ、春の県大会、そして夏の中体連に向かうことができるようにしていきます。

男子ソフトテニス部

2年生11名、1年生19名で日々練習に励んでいます。人数が多い中でも効率的に練習をするために、お互いに声をかけ合い、少しでも上達するためにどうすればよいかを考えながら練習しています。また、テニスプレーヤーとしてだけではなく、中学生としても互いに切磋琢磨し合える関係をつくっています。

陸上競技部

僕たち陸上競技部は、2年生11人、1年生6人で活動をしています。陸上は個人種目ですが、陸上競技部は集団であることから、「全員で声を出す」「全員でキビキビ動く」など、「全員で」ということを大切にしながら活動しています。今後は部員一人ひとりの自己記録を伸ばせるように仲間同士で声を掛け合いながら、日々の練習を頑張っていきたいと思います。

男子バレーボール部

僕たち男子バレーボール部は、2年生5人、1年生13人で活動しています。声を出すことや準備や片付けも人任せにするのではなく、自分から動くことや仲間と協力することを大切にしています。また、コーチや先生、家族など支えてくださる方々すべての人々に感謝の気持ちを全員がもち、練習に取り組んでいます。

女子ソフトテニス部

2年生7名、1年生16名、計23名で日々練習に励んでいます。部員数が多く、練習時間も限られた中で、効率的に練習をするためにはどうすればいいのかを考えながら練習しています。そして、互いに切磋琢磨し、全員でテニスを楽しみ合える関係づくりを大切にしています。

男子バスケットボール部

「積極的な自分づくり」をめざして、2年生8名、1年生9名で活動をしています。技術だけではなく、メンタルの強さ、礼儀正しさなどの社会人として必要な力も身に付けられるよう日々の練習に取り組んでいます。

あたりまえのことをあたりまえにできることからスタートし、困難な事にも立ち向かっていく力を付けていけるように頑張っています。地区大会出場をめざします。

女子バレーボール部

私たち女子バレーボール部は、2年生4人、1年生4人で活動しています。人数が少なく未経験者が多いので、声をしっかり出すことを大切に活動しています。ゲーム形式の練習では、どうしたら点をとることができるかを考えて練習しています。どんなに厳しい練習でも、一生懸命取り組んで大会で結果が残せるように、日々の練習を全力で頑張っています。

卓球部

卓球部では、2年生18名・1年生3名で活動をしています。技術面だけではなく、関わる人への感謝や人と関わる上での礼儀なども大切にし、けじめをつけて練習の1つ1つに取り組み、試合でも勝ち上がれるように努力を続けています。先輩方が残した成績を超えることを目標に、男女ともに一生懸命試合に向けて頑張っていきます。

女子バスケットボール部

女子バスケットボール部は2年生6名、1年生8名で声を掛け合いながら練習に励んでいます。個人の技術の向上だけではなく、あいさつなど礼儀にもこだわりをもち、活動ができることへの感謝の気持ちを忘れないようにしています。全員が初心者ですが、先生方やコーチに教えていただきながら、日々成長できるように、これからも努力していきます。

吹奏楽部

私たち吹奏楽部は、1年生16人、2年生9人の計25人で活動しています。

モットーは「一音入魂」です。目標は、吹奏楽コンクール地区大会で金賞をとり、県大会に出場することです。そのために、基礎練習や挨拶、返事などにこだわり、先輩、後輩の関わりを大切にしながら練習に取り組んでいます。このメンバーで、音楽を創ることを楽しんで、これからも頑張っていきます。

剣道部

私たち剣道部は、男子2名、女子9名で活動しています。新型コロナウイルス感染症の影響で限られた時間しか練習できませんが、チームのみんなで切磋琢磨し、稽古に励んでいます。中学校から剣道を始めた人も多いので、互いに教え合い高め合っています。これからも、挨拶や礼儀作法も大切にしながら頑張りたいです。

茶道部

茶道部は、2年生9名、1年生7名で活動しています。年に数回のお茶会に向けて、お点前の稽古に励んでいます。中学から始めた部員ばかりですが、先生や先輩に教えてもらい、作法を覚えられるよう練習してきました。9月のお茶会では、保護者への感謝の気持ちを込めて一服差し上げることができました。これからも教え合いを大切にして、美しいお点前を披露できるように日々精進します。

パソコン部

主にタイピングを行い、間違えずに、素早く打てるように、練習しています。また、ワープロソフトを使ってチラシ作りや文章作りを通して、パソコン操作の基本を学んでいます。先輩・後輩の分け隔てなく、教え合いができているのも、パソコン部の魅力です。

私たちのPTA

垂井町立岩手小学校PTA

はじめに

垂井町立岩手小学校は、垂井町の北部に位置し、かつての名将竹中半兵衛公ゆかりの地に位置しています。学校の北西菩提山には竹中家のお城跡があり、竹中家の櫓門は地域のシンボルともなっています。

子どもたちの中にはその櫓門を毎日くぐって登下校する子もいて、地域の誇りとなっています。

このような環境に包まれ、全校児童数九十名で元気に活動しています。

PTA紹介

今年度のPTAスローガンは「い：今できることを 楽しく全力で　わ：わくわくドキドキ忘れずに　で：適度な距離で 心は密に！」です。今年度は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、その予防のため様々な制約が伴う中での出発でした。

そんな中でもできることはある。子どもたちと親と地域、先生方との心の絆は密にして頑張ろうという願いがあります。あらかじめ改革していたことすべては実施できませんでしたが、今できることをできる形で、参加してくださる会員の方と共に楽しく活動しています。

PTA活動について

今年度実施した活動は次のようなものです。

お話プレゼント

五、六年生の保護者が分担して年間四回、朝の活動の際に絵本などの読み聞かせをしています。担当する保護者が、子どもたちの笑顔を想像して読む本を決め、各学年で読み聞かせをするのです。

楽しいところでは笑い、悲しいところでは涙ぐむ子どもたちの真剣なまなざしが何よりのご褒美となっています。「楽しかったよ。」「もっと読んで。」と、子どもたちにとても好評です。本を媒介にして子どもたちとの心のつながりが作れています。

PTA奉仕活動

例年親子で実施していた奉仕活動を保護者（PTA実行委員）と先生方とに限定して実施しました。先生方や学校ボランティアさん方の助けになればと普段できないところの掃除をしました。

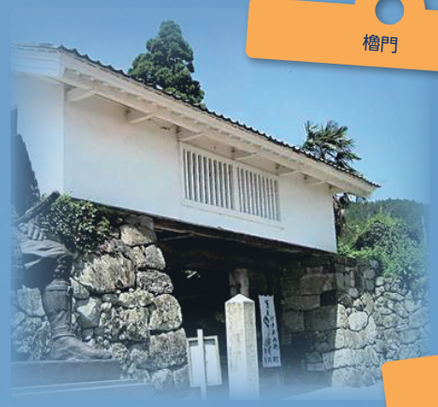
ソーシャルディスタンス、時間制限を設け、できることを楽しく実施しました。

おやじ・おふくろの会

四月に募集した希望者の会員の方と先生とで、子どもたちの活動がスムーズに進むよう作業をしました。当日は男女十七名の保護者の方が集まっていただき、全員で体育館の床磨きをしました。保護者同士で普段なかなか顔を合わせて話をする機会が少ない中でワイワイと手を動かし、結果として予想以上に綺麗に仕上がり、人と人との繋がりの大切さ、マンパワーを改めて感じることができました。

おわりに

今回紹介しました活動は、本来会員すべてが関わり、子どもたちのために活動することを目的としていました。残念ながら当初の目的は果たすことができず、とても残念に思っています。しかし、このコロナ禍の中で、保護者と先生、地域が子どもたちのために何ができるのかをこれだけ真剣に考えたことが、かけがえのない宝物となり、ウィズコロナ、アフターコロナにつながっていくことを切に願っています。



お話プレゼント

奉仕活動

おやじ・おふくろの会

がんばる子らの

汗と笑顔と眼差しと

岐阜市立長良小学校

こどう 天神川探検

くらし みんなで練り合う

全校係 一人でも黙々と取り組む

いずみ 紙すきでオリジナルはがきづくり

みがき 地域先生から学ぶ

みずのわ 「みずのわ」のお姉さんから手紙をもらったよ